
忘らるる神の欠片～眠り男の英雄譚～

とおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘らるる神の欠片〜眠り男の英雄譚〜

【Nコード】

N1270W

【作者名】

とおん

【あらすじ】

夢をもって王都にやってきた大地の民の田舎娘ヘルセルクキアラ。けれど、都会は怖いところだった……。続くトラブル、拾った災難。キアラが半泣きで頼ったのは、これまた王都で出会った、大地の民の珍妙な男で……？

タイトルちょこつと変えました。

ぶろろーぐ（前書き）

なるべくテンポよく、サクサク読み進める話を目指します！（予定）

ぶろろーぐ

たぶん。

こうなることは。

最初から、ちゃんとわかっていた。

「ねえ。後悔してないの？」

「後悔って何を？」

こっちは、ちょっとした心臓に悪いドキドキ感を持ってそう聞いたのに。

やつは飄々とした調子で首を傾げた。

この先は、大広間。

吟遊詩人が謳う英雄譚ヒロイック・サーガで言うならば。

今はさしずめ、最終決戦のさいこのひととき。

緊張感も最高潮に、観客だって固唾を吞んで成り行きを見守る場面のはず。

それなのに、呑気にあくびなんてしているこの男はなんなのだ。

「だから！！ 私がつてきた厄介話に巻き込まれて、こういう成り行きになっちゃったことだよ！」

その事実にも、少しくらいは反省してたし。

この男が、そんな責めるような言葉を吐くなんてことは思っていなかったけど、それでもあくびなんてしなければ。
ちゃんと、さらりとさりげなく。

ごめんねって謝ろうと思っていたのに……
おかげで、おもいきり溜息ついちゃったし。
かみついちゃったし、怒鳴りつけちゃったし。

あくびなんて、この重要な場面でしなければ……！
…… おかげですべてが台無しだ。

「ごめんだけどさ、そろそろ行かない？ おれ、ちょっと眠いかも……」

少しくらいは空気読め！

内心の毒づきなんてそ知らぬ顔で、またひとつ。
やつは、ふああああと盛大なあくびをかます。

「さすがにここでさ、睡眠とるのはまずいだろ？」

この期に及んで、能天気になんな台詞を吐くもんだから。

申し訳ない気持ちなんて吹き飛んでしまった。
謝ろうなんて殊勝な心がけも、今ははるか彼方だ。
そんな事実があったことさえ認めたくない。

「あのね……」

「おれね、後悔はしない主義だから、安心していーよ」

さらに盛大な文句を浴びせようとした、その瞬間。

ぼん、と反則のように頭のとっぺんに乗せられた、その手。

でも、それは一瞬で。

次の瞬間には、先に立ってあるいていく背中が見えた。

ぶろろーぐ（後書き）

楽しんでいただければ、嬉しいです！

ひとつめ。

立ち並ぶ家々は、どの家も透明なガラスつきの窓と重そうな扉を持っていた。

細い細い路地までもが赤い煉瓦で舗装され。

市を行きかう人々は、村の祭りでめかしこんだ人たちよりもきれいに着飾り。

村の祭りよりもにぎやかな喧騒であふれていた。

「うわあああ……」

乗せてもらっていた馬車から降りて。キアラは思わず感嘆の声を上げた。

王都というのはなんて華やかなところなんだろう。

「なんか……ニンゲンがいっぱい」

きよろきよろと辺りを見回し、そんな感想を口にする。

すると、御者台で手綱を取っていた気のいいおっちゃんが豪快な笑い声を上げた。

「そりやそうだろうよ！　ここはニンゲンの町だからな！」

おっちゃんは人間だったが、見れば見るほど、キアラと同じ大地^{ベル}の民によく似ている。^{セルク}

口の周りから顎にかけてびっしりと生えた黒いひげ。

太い首や出っ張った腹。

刺青をほどこした太ももほどの太さのある二の腕も。

短く刈り込んだ黒い髪の毛の上に、大地^{ベルセルク}の民の特徴とも言える獣のような耳がないのが本当に不思議でしょうがない。

「あそこに見えるでっかい建物が、お城ってやつだ」

「おしろ？」

「おまえさんが探している、王子様がいるところさ」

おっちゃんの言葉に、キアラはただでさえ丸い目をさらに大きく

見開いて、その太い指先が指し示す方を一生懸命見やった。

どこまでも続く、町並みの、少し途切れたところ。

小高い丘の上に、周りをぐるりといかめしい壁で囲まれた、ひときわ白く高い建物があつた。

「……おうじさま」

そうか。

あそこに、最終目標の王子様がいるのか。

じつとみつめていると、おっちゃんがさらに面白そうに笑つた。

「まあ、お城なんてところは貴族じゃねえと入れんと思うがな」

「きぞく？」

「大地の民に、その概念を説明すんのはちつと骨なんだがな」

顎に手をやりながら、おっちゃんはううむ、と低く唸る。

大地の民、またの名をベルセルク。

いふなれば半獣の民で、特徴的なのは頭の上にある獣の耳と、肉食獣のような細い瞳孔の瞳。

戦闘能力に長けた民で森に棲み、まれに傭兵として己の腕を売つて、戦を渡り歩く者もいるという。

彼らは年長者や経験を積んだものを敬いはするが、身分という概念も、血筋という概念も持ち合わせてはいないのだ。

「まあ、王子様よりちつとばかりえらくないのが貴族つてことだ」

「……おうじさまは偉いの？」

「王族つてのは、無条件で偉いもんさ。そういうことになつとるんだ」

キアラは難しい顔つきでふうん、とだけ頷いた。

そうか、おうじさまはエライ人だったのか、とただそれだけを脳

みそに叩き込む。

どうエライのかはわからなかったが、無条件でエライというのだから、呪医のようなモノかもしれないと予測してみる。きつとなにか、おうじさまにしか出来ないことがあるのに違いない。

「まあ行くだけ行ってみればいいさ。もうじき武術大会もあるというし、うまく参加できれば遠目にくらいは拝めるかもしれないねえぜ？大地の民ってのは、武術が得意なんだろう？」

「私はあんまり強くないと思う。あにさまやあねさまたちは強いけど」

町へ出るといったキアラに、餞別として彼らがくれた大剣は今もすっかり背中に背負っているものの。この大きな剣を、あにさまやあねさまたちのようにうまく使いこなせる気はしない。

「まあなんでもいいけどよ。とりあえず、そのぽかーんと口を開けるのはやめた方がいんじゃないかねえのか。おのぼりさん丸出しだぜ？財布だつてすられちまうよ」

おっちゃんは苦笑交じりにそういうと、退屈そうにしていた馬にひとつ鞭をくれた。

「そんじゃな。運命の女神の気まぐれがあつたら、また会おうぜ」

ごつい手をひらひらとふって、おっちゃんのはのんびり馬車を走らせて去って行く。

「ありがとう！」

大きな背中にお礼をいって、キアラは大剣をしっかりと背負いなおした。

夢にまで見た、王都ディディン。
目的を達するまでは、きっと帰らないと。
そうかたく心に決めた。

ふたつめ。

意気揚々と市に足を踏み入れて、キアラは辺りを見回した。

右にも左にも、屋台やらなにやらが立ち並ぶ。

本の中でしか見たことのないような、鱗に覆われた奇怪な生き物や、南国の果物。なにかの肉やら野菜やらが、生のままだったり調理されたりしてさまざまに市場を彩っている。

「すごいなあ……」

「おう、ベルセルクのねえちゃん！」

ぼうつと辺りに見とれてっていると、串に肉を刺して焼いている男から威勢のいい声がかかった。

「食ってかねえか？ ベルセルクが普段食ってる肉よりは鮮度は落ちるかも知れねえが、味は負けてねえぞ！」

香ばしい香りが、風に吹かれてふわりと鼻先をかすめていく。

くう、と体が空腹を訴えた。

腹の辺りに手を当てて、考えることしばし。

「ん……」

香ばしいにおい。

うまそうな焼け具合。

どこまでも誘惑してくる肉の串…… 案件はただひとつ。値段だ。

た、たかい……

値段としては、小銀貨1枚。

銅貨でいえば、10枚分。

里では、こんな串焼き、銅貨3枚程度のものだ。

あまりの高さに、空腹もまぎれて考え込んでしまう。

ど、どうしよう……

おなかは減っていたし、串焼きはうまそうだが。そうそうお金に余裕があるわけでもない。これから、宿を見つけてしばらく滞在し。なんとか「おうじさま」に会う手立てを考えなくてはいけないのだ。

あまりに真剣に考え込んでいたせいだろうか。人の流れの邪魔になるということが、すっかり念頭から抜けていた。

おかげでしたたかに突き飛ばされて、数歩たたらを踏む。

「んなところで突っ立ってるんじゃないよ！」

買い物籠を下げたおばちゃんが、忌々しそうに声を荒げて通り過ぎていく。

「すいません……」

ちいさく謝罪を口にして、キアラは溜めていた息を吐き出した。

突き飛ばされたのは痛かったけれど、おかげで目が醒めた。

市場の陽気にまどわされていらぬ買い物をしてしまうところだった。

せつやく、せつやく。

くるくるなるおなかをなだめつつ、曖昧な笑みを屋台の男に向け、キアラはそうつと串焼きから背を向けた。

もっと安くで、おなか膨れるものを探そう。

初めて王都にやってきたのに、もう財布の心配をしなくてはならないのは切ないが。

遊びにきているわけではないのだから、もっとしっかりしなくてはいけないだろう。

『ひとりで王都に行くとか、だいじょうぶなの、きい？』

心配性な姉のひとりの顔が脳裏に浮かぶ。

「だいじょうぶだよ、あねさま。私ちゃんと出来るもの。ちゃんとおうじさまに会ってくるよ！」

幻にそう返事をし。

キアラはきよろきよろ辺りを見回した。

とりあえず、安い宿を探さなくてはいけない。

ふたつめ。(後書き)

小銅貨10枚〓銅貨1枚(100円程度)

銅貨10枚〓小銀貨1枚(1000円程度)

小銀貨10枚〓銀貨1枚(10000円程度)

銀貨10枚〓小金貨1枚(10万円)

小金貨10枚〓金貨1枚(100万円)

小銅貨1枚10円程度と想像していただければいいかと。

お祭りの時の串焼きと思えば、そう高くもないのかなあ……

みつめ。

宿は比較的すぐにみつかった。

あまり安いところは無用心だとさんざん言い聞かせられていたので、そこそこの値段の宿に当たりをつける。表通りに近く、清潔そうなお宿だった。

一泊で銀貨一枚と半銀貨が五枚。

結構な出費だとは思ったが、そう王都に長居をするつもりもなかったので、とりあえずはよしとした。4～5日なら滞在しても、おつりが来るほどの所持金は用意してある。

「お代は先にいただくことになってるんですよ」

一階のカウンターで宿のおかみさんらしきひとにににことそう促され、キアラは頷いて懷から財布を取り出す。

いや、取り出そうとした。

「あれ……？」

あるはずの場所に、財布はなく。

指先はひたすら空振りするばかりだ。

「え？」

あわててもう一度懷を探るが、手になじんだ財布の感触はどこにもない。

さーっと血の気が音を立てて引いていくのがわかる。

串焼きの屋台の前で、買おうかどうかを悩んだ時は、確かにあったと思う。

そのあとは？

青くなりながら、懐の中を、さらに丁寧に探っていく。
手巾。傷薬。短刀。

財布。

私の、財布。

全財産。

ない、かも……??

完全に、硬直したと思う。

心臓がどきどきと全力疾走をはじめ。

目の前が真っ暗になったような気がした。

ない、ないの？

ほんとにないの？

いつなくした?!

いつ落とした?!

いつ?! いつ?! いつ?!

頭の中はめまぐるしく記憶をたどる。

けれど、決定的な瞬間は、なぜか思い出せない。

確かに、懐に入れておいたのに。

「……まさか、お代をもっていないのに、泊まろうとしたとかじゃないですね?」

ひんやりとした、おかみの声が耳を打つ。

「いえあの、ちゃんと持ってたんです!」

「でも今ない?」

「ちゃんと、ここに……っ」

どうしよう。

どうしよう、どうしよう。どうしよう。

「じゃあ、掬られたんだろう。あんた、みるからに田舎から出てきた小娘だからね」

客じゃないとわかった途端、おかみの声はさらに冷えた。

「言っとくけど、あんたの事情を斟酌する余裕も義理も、うちにはないからね」

どうしよう。

お金、なかったらどうしよう。

冷たいおかみの声も、耳には入らない。

「そこにいたら、ほかのお客さんの邪魔になるんだよ。とつと行っておくれ」

乱暴な手つきで宿を放り出されても、キアラは自分で動けなかった。

思考は迷走しまくって、ただどうしように連発している。

今までにぎやかでいい町だと思っていた王都が、突然冷たい顔つきになったような気さえた。

お金がなかったら、まず今日のご飯が食べられない。

まあ、それくらいは我慢できる。

ベルセルク
大地の民の体力は数日の絶食くらい軽く耐えられるはずだ。

でも。

お金がなかったら、王都に居続けることが出来ない。

おうじさまを探すことも出来ない。

いったん森に戻るにしても。

お金がなければ、戻ることも出来ない。

王都から森までは、結構な距離があるのだ。

そして、何よりの問題点は。

お金を稼ぐ手段を、どうしても思い浮かべることが出来ないこと
だった。

よっつめ。

キアラにできることは実のところ、あまりない。

一応大地の民の一員として、武術系一般は幼いころから叩き込まれているが、そう強い方ではないのである。

傭兵、かなあ……

それくらいなら、できるかなあ……

とはいっても。

自分になにができるか、ということ考えた時に、一番にその職種が頭に上るくらいには戦うことになれていたし。そう強くないとはいっても、大地の民基準でのことなので、人間と比較すればまあ上級の部類にかるうじて引つかかるくらいの実力を有していることも自覚していた。

でもさ、でもさー……

私なんか雇ってくれないよねえ……

問題点は自分でもちゃんとわかっている。

一も二もなく外見なのだ。

頭の上にひょっこり生えた獣の耳。

猫の瞳をおもわせる瞳孔が細い黄金の双眸。

体の線は細くて薄い。子供っぽくて華奢で。

どう頑張ってみても。

得物の大剣に振り回されていそうなイメージが付きまとうてしま

戦闘職種には見えない、この外見。

あゝもう。

なんでもっと、あねさまとかあにさまみたいに、ごつくかつこよく生まれてこなかったんだろう。

そうすれば、傭兵も戦士も、どんな職種も思いのままだ。

ふかぶかと溜息をついて、人波を眺める。

どうにかして、実力を見せる機会はないものか。

一度みてもらえさえすれば、雇ってもらえるかもしれない。

もうひとつ、息をついて。

キアラはどうにかその場を動いた。

いつまでもここにいてもしょうがない。

ここにいても、お金は稼げないし、失くしてしまった財布が出てくるわけでもない。

少しでも前向きになろうとは思ったが。

財布をなくした衝撃はそう簡単に消えてはくれなかった。

「ねーちゃん」

通りを外れて横道にそれたキアラは。そのあたりに乱雑に積み上げられた木の箱の上に座りこんだ。

ぼんやりとそこで通りを眺めていると、遠くで声がした。

「ねーちゃんってば」

別に無視をしていたわけではないのだが。

よもやこの知り合い皆無の王都で、自分に話しかけてくるものが

いるとは思えなかった。

けれど、服まで引つ張られれば、自分に話しかけてきているのは疑いようもない。

空ろなままのまなざしを向けると、10歳ばかりの少年が、よく日に焼けた笑顔を向けていた。

「よう、ねーちゃん。元気ないね、どーしたのさ」

少年は、ごくごく普通の人間のようにだった。

今日明日の衣食住に困っているふうでもなく。

そこらへんで遊び転がっている、王都の少年、という感じだ。

「……なんでもない」

一通りの観察をしたあと、キアラはまたふいつと視線をそらした。子供は別にきらいではないが。

今、子供と一緒に遊びたい気分ではなかった。

「おいらさー、おなかすいてるんだけどさ。小銭がこんだけしかないんだ」

そういつて、少年は、キアラにしっかり握り締めていた手を開いてみせた。

その幼げな手に握られていたのは、小銀貨が三枚。

「あの、肉串がたべたいんだけどさ。お金がたりないんだよね？」

そう、と気のない様子でキアラは応じた。

「ねーちゃんも地方から出てきた感、満載だし。奢ってくれとはい

わないからさ。半分お金出してくんない？ 半分こしよーよ」

隣は何をする人ぞ、とばかり。

他人に興味はありません的な顔をして、せかせか動いている王都の人間にしてみても、なんだろう。田舎的提案だと思う。

森でなら、こんな提案は日常茶飯事だ。

同年代の子供らは、みんな兄弟姉妹のようなものだし。

上の世代はだれでもあにさまあねさまだ。

その上ともなれば、みな父であり母であり。爺さまであり婆さまなのだ。

「悪くない提案だと思っただけだよ」

ぽつり、とキアラは力なく呟いた。

きらきらとした少年の笑顔がとてつもなくまぶしい。

「私の所持金、キミよりも少ないから。他をあたったほうがいいよ」

淡々と事実だけを告げて、ふたたび通りへと視線を転じる。

まぶしい笑顔のまま、少年が力チンと凍りついたのが目の端に映った。

「は？ なに、もうやられちゃったあとなわけ？」

そして、数瞬。

ひびいた少年の声は。

先ほどの純真そのものな声音ではなく、はげしく侮蔑のこもった声音となっていた。

よっつめ。(後書き)

ヒーローがいつまでたっても出てきません……

いつつめ。

キアラは、事態が飲み込めないまま、ただ幾度か目をしばたいた。純情少年はどこにいつてしまったのだろうか？

まるで世をひねたような眼差しをしてこちらを見ているこの少年は、本当に先ほどの少年と同一人物なのか。

「ぽけつとした顔をしてるから、やりやすそうだと思ったんだよね……考えることはみんな一緒ってわけか」

「……やりやすいつて、なにが？」

もしかして、二重人格じゃないのか、と思いつつも、そう聞くと少年は馬鹿にするのを通り過ぎて、逆に同情したような顔つきになった。

「馬鹿じゃねえのか、ねーちゃん。おいらはねーちゃんを騙そうとしたんだよ？　だって、騙しやすそうな顔してるから」

少年が説明してくれたところによると。

腹が減ってしょうがないから、半分お金を出して欲しい、半分は買った分を返すから。

そういつて、相手に半額を出してもらって、それをもったままとんずらするのだそうだ。

成功するポイントは、食べ物屋の店先で買おうかどうかを悩んでいた観光客（それも田舎から出てきたばいひと）を狙うことらしい。運がよければ、全額分を出してもらえたりすることもあるのだとか。

「財布だって、どうせぽけつとしてるときに、掏られたとかそんな

んだろ？ さすがに可愛いそうだから、授業料はタダにしておいてやるよ。ねーちゃん、王都に順応できなさそうだし、早めに里に帰った方がいいと思うよ」

んじゃ、またねー

ひらひらと面倒くさそうに手をふって、人波まぎれていく少年の背中を、キアラは半ば呆然としたまま見送った。

あんなに純情そうに見えた少年が、詐欺師。

まあ、片手間に小遣いを稼ぐようなものだが、それでも人を騙すのは詐欺師に違いない。

それも充分に驚きだが、馬鹿にされた拳句同情され、手の内をばらしてもう引つ掛かるなよと、明らかに年下の少年に諭されるのはいかなものか。

ちょっと。

いや、大分情けない気がする。

というか、あんなに小さな子供までが犯罪者。都会というところは、なんて恐ろしいところなんだろう。

目的のおうじさまを遠目に見ることさえ果たしていなかったが、もはや森に帰りたい気分だった。

けれど、問題点がひとつ。

帰るといっても、どうやって帰ればいいのか。

お金もないのに。

はああ、と溜息をついて、箱の上で膝を抱え込む。

その膝に顔を埋めようとして、キアラははっと顔を上げた。

鼻先をかすめた、かすかな香り。
森の奥にある、世界樹の。翡翠色の幹をいぶして出来る香の
ような。

爽やかで懐かしい香りが、ふわりと風に溶けた。そんな気がした。
そうして、視界の端をかすめた、あの模様は。

キアラは箱を後ろに蹴り倒すようにして、路地を飛び出した。

「待つて！」

叫んだキアラに、道行く人が驚いたように振り返る。

「待つて、あにさまっつー！」

見えたのは、ほんの一瞬だったが、キアラの目はいい。

絶対に見間違えじゃない。

目深にかぶったフードつきのローブの下から、ちらりとみえた、
二の腕。

太くたくましいその腕に見えたその紋様は、大地の民が成人の儀
のときに自ら彫りこむ刺青だ。大地をたたえ、世界樹をたたえた祈
りの紋様。

「待つてー！！！」

もう一度鋭く叫んで、キアラはローブ姿の背中に追いすがった。
必死で手を伸ばして、ローブの端をつかむ。
はらり、とローブが。

その頭から、すべりおちた。

こぼれたのは。灰色の長い髪――

いつつめ。(後書き)

次こそ、ヒーロー？登場でしょうか……

むつつめ。

灰色髪の男は、驚いたような顔つきで、歩みを止めた。

「……^{ベルセルク}大地の民？」

大地の民の、特徴的な瞳孔の細い金色の眼差しが、いささか不審げにこちらにむけられている。

「あにさま」

人間には理解しがたいかもしれないが。

大地の民の生活様式というか、生活形態は少ばかり変わっている。

同年代の子供はみなひとつところに集められ。

里人すべてが祖母であり祖父であり。父であり、母である。

いふなれば、個の家族という認識はなく、里ひとつがすべて家族のようなものだった。

つまり。

たとえ、顔も知らない相手だったとしても。

同じ大地の民で、相手が年上の男ならば。それはもう兄なのである。

灰色髪の男を、キアラは知らなかった。

知らなかったけれど、ここで助けをつかまなければ、キアラに明日はない。

同種族にあつたのがこの状況下における最大の幸運であるとばかりに、キアラはローブをつかむ手に力をこめた。

「あにさま、私はキアラといいます。お願いします、助けてください、

困ってるんです」

はあ、と男は困ったように瞬いた。
髪と同じ色をした、灰色の獣の耳も、動きを決めかねたように落ち着きなく動いている。

「ね、あにさま。困ってるんです」

「……おれは、ジンと言ったが。ここじゃ、人の邪魔になるから、すこし場所を移そうか」

促されるままに、キアラはジンについて、大通りを少し外れた裏道に入る。

ジンは、もしかしたらキアラの熱い視線に負けたのかもしれない。

懐から出した小銭で、屋台で売っていた冷たい果実水を買って渡してくれた。

「で、キアラ。なんで困ってるんだ？」

冷たくひえた果実水はうまかった。
やさしい甘さに、思わず口元がほころぶ。

「おいしいです」
「……そうか」

結果的に、ジンの問いを無視したことになるが、かまわないと思った。

こんなおいしい飲み物は初めてだ。
よかったなど、いささか投げやりに呟いたジンは、そのあたり

に積み上げてあった木箱に頬杖をついて人波を眺めている。

果実水を舐めるように飲みながら、キアラはもう一度ジインの腕の彫り物をみつめた。

里の誰よりも複雑な紋様が彫られていると思う。

大体が。文様を自分で彫りこむその痛みのために、簡素な紋様を好むというのに、里のじいさまたちよりもずっとずっと細やかでうつくしい紋様がそこにはしっかりと刻まれている。

神代の祈りの言葉が、省略されずにしっかりと彫られているのだ。

「ジインにいさま。私、お財布をなくしちゃったんです」

紋様は、簡素なものが好まれるとはいえ。

複雑であれば複雑であるほど、いいのである。

それは勇気と忍耐力の象徴であり、誇るべきものだ。

こんなに複雑な刺青をもつジインは。きっと懐も深い人物に違いない。

多大なる期待をこめて、キアラは果実水を口に含みながら、ジインをみつめた。

けれど。

聞いていたのかいないのか、ジインは顎が外れそうなほどの大あくびをしている真っ最中だった。

ななつめ。

「あ、あの……？」

キアラの口許は少なからずひきつった。

恐らくだが。キアラの認識に間違いさえなければ。

今、この場面は重要な局面を迎えているはずである。

王都に出てきて、財布をなくし、困っている少女。

たまたま通りがかった同種族の、恐らく頼りになるであろう男。

助けを求める少女。

かつこよく！！その願いを容れる男。

昔から吟遊詩人がよく謳う、英雄譚はすべてここから始まるはずだ。

勇者だって、助けを求められなければ、冒険には出ないはずなのだ。

それなのになぜ。

この男はあくびなんて呑気にしているのだろうか。

「ああ、ごめん」

キアラの呆気にとられた眼差しに気がついたのか、ジインは軽い調子で謝罪を口にした。

悪びれぬ様子で頭をかきながら、またあくびをひとつする。

「なんか眠くてさ。それで、なんだっけ？」

呆氣にとられたまま、キアラはゆつくりと瞬いた。

言うなれば、英雄的存在をこの場面で担うであろうこの男が、こんな調子でいいのだろうか。

いや、あんまりよくないだろう。絶対よくない。

傍観している分にはいいかもしれないが、英雄が英雄になつてくれなければ、キアラの窮地は救われない。

もっとも、お金だけを借りられればすむ話ではあるのだけれど。そこはたぶん。気分の問題なのだ。

あくび。それも顎が外れんばかりの大あくび。

話の途中なのに。

恥を忍んで、助けてくれないかと頼んでいるのに。

「つまり、ですね」

謙虚に頼むのはもうやめだ。

ごくりと、果実水の最後の一口を豪快に飲み込んで、手の甲で口の辺りをぬぐった。

「私が聞きたいのは、私が財布を落としたという話を聞いて」

腰に手を当てて、ジインの前に回りこむ。

ずいっと身を乗り出して。その金色の綺麗な瞳を覗き込んだ。

「かわいい同族の妹の窮地を。もともと助ける気だったのか、それとも今、助ける気になったのか、ということですよ」

ジインはその言葉に。一言で言うなれば、きょとん、とした。言葉を吟味しているのか。数回まばたきを繰り返す。

「なんだか、すごく、前向きな質問だな」

あふ、とさつきからすれば、いくぶん遠慮がちなあくびをもうひとつだけして、ジインは苦笑まじりにつぶやいた。

「助ける以外の選択肢はないのか？」

からかうようなその口調。

まあ、たしかに普通なら。

『助けない』『いやいや助ける』『乗り気で助ける』『他の手を考える』くらいの選択肢はあってしかるべきだろう。

「絶対に助けてくれると、信じていますから」

ここまで精緻な紋様を腕もつ、同種族の男。しかも、年上。

この王都で。この困った局面で。

勝手な言い草だと、理性ではわかっているが。

このタイミングで現れてくれるのだから。

ヒーローにちがいないのだ、この男は。少なくとも自分にとって。

「まあ、あれだ」

ジインの口許に、からかうような笑みが浮かんでいる。

ここはもう、しょうがない助けてやるか、という流れに違いない。

期待を眼差しにのせて、みつめるキアラにジインは言った。

「おれ、眠いからちょっと寝るわ。悪いけど、その話はまたあとでな」

やつつめ。

なんだろう。

今、盛大な空耳を聞いたような気がする。

呆氣にとられるキアラの目の前で、ジインは木箱の上に片膝を立て。その上に顎を乗せた。

「おやすみ」

そして、礼儀正しく一言。

「え、ちよつとあの？」

キアラが止めるまもなく、その数瞬後。すつ、と安らかな寝息が聞こえた。

すばらしいまでの寝つきのよさ。赤ん坊よりも寝つきがいいんじゃないだろうか。

「ていうか、なんで寝てるの、この人？」

まだ、これが乗合馬車の中とか。移動途中の獣の上とか。そういうことなら話はわかる。

けれど、ここは公共の場で。おまけに道で。仮に雨とかが降ってきたとしても屋根なんかはないし。いや、それよりも前に、こんなところで寝るなんて、ちよつと用心が悪いような気がするのだが。

お財布とか、取られちゃっても知らないよ？

途方に暮れたまま、キアラはすうすう眠るジインの顔をみつめた。大地の民にしては、白く滑らかな肌。通った鼻梁に薄い唇。長いまつげ。

……なんか、私よりも美人じゃない？

さらりと通りを渡る風に、灰色の髪がとける。
獣のような耳が、時折ぴくりと音に反応するのも、またかわいらしい。

なんかいろいろ、負けてる気がする。

そんな感想を胸に、キアラもまた、木箱に腰をかけて通りを眺めた。

せわしなく行き交う人々。いろいろなものに、無関心なその横顔。王都って言うところは、どうも人と人との関係が希薄らしい。たまに困ったふうな人がいても。気づいていながらも、そのまま立ち去ってしまう人の、なんと多いことだろう。

しばらくそのまま、通りを眺めていたキアラだったが、そのうち腹がぐうとなつて。

ふと、われに返った。

まだそう長い時間がたったわけではないが、ジインはいつまで眠るのだろう。

その秀麗な横顔をみつめて、頬をちよつとつついてみたりもしたが、ジインが起きる気配は微塵もない。すうすうと気持ちよさげな寝息をたてるばかりである。

「まあいつか」

どうせ、いくあてがあるわけでもないし。

お金もないし。

起きるまで待ったとしても、そうなにか困るわけでもないし。

そう開き直って、キアラもまた、膝を抱えて顎をその上に乗せてみた。

うん、意外とくつろげるかもしれない。と、そんな感想を抱く。

不穏な香りが鼻先を掠めたのは、ちょうどそんなときだった。

え？

森では、時折かいだ香り。そう、特に狩りのときに。
濃厚な、命がこぼれる香り。

あかくあかく、ながれる死の香り。

この王都の雑踏には、あまりにも不似合いな。

膝を抱えていた手をそつとはなし。キアラは油断なくあたりを窺った。

耳を動かして、音もさぐる。

そうすると、ちょうど香りが流れてくる方から、ぱたぱたとせわしなく駆ける音が聴こえた。そしてその後からは、乱雑に続く複数の足音——それもおそらく、武装した。

「いた、ジン！」

声と共に、雑踏から飛び出してきたのは、まだ10をいくつか過ぎた程度にしか見えない、育ちのよさそうな少年だった。
やわらかく波打つ、金色の髪。夏の空の色を移した瞳。
のばされた腕は白く、少女のように繊細だ。

「ジン、助けて……って！」

抱きつくように、ジンに手を伸ばし。

そして、一瞬動きを止め。

ついで、少年は顔から血の気を失った。

「寝てるし!!!」

その声は絶望を色濃く宿したまま、雑踏に溶けて消えていった。

いっのつめ。

不吉な血の香りは、この少年から漂ってくるようだった。
顔を青くしたまま、少年はいまだすやすやと眠り続けるジインの胸倉を両手でつかみあげる。

「ジイン、起きて！起きてってば、ねえ！」

泣きそうな声を上げて少年はジインをゆすり続けるが、ジインは目覚める気配さえ見せはしない。

「ジイン、貴方はなんでいつも重要な場面で寝ているんだよ！嫌がらせだろう！ぼくを困らせたいと思ってるんだろう！起きてよ、ジイン！ジインってば！！！」

血の香がわずかに増した気がした。

見れば、少年の衣に赤いしみが出来ている。
わずかに破れ、その間から傷が覗いていた。そうたいした傷ではなさそうだったが、それにしても、こんな美少女と紛うばかりの少年が刀傷とは物騒この上ない。

そう、物騒な刀傷——この少年にはあまりにも不似合いな。

「ねえ。大丈夫？」

じゃあ、これはもしかしたらチャンスかもしれない、と思う。
キアラだって大地の民だ。

ここでこの子を助けることが出来れば。腕を認められれば。
いつも外見ではねられてしまう、守護者や傭兵になれるかもしれ

ない。

「……あなたはだれ？」

声をかければ、少年はようやっと。キアラの存在に気づいたようだった。

「大地の民？ジインの知り合い？」

ジインから手を離し、つとキアラのほうに歩み寄る。

ぐらりとバランスを崩したジインの体が木箱からずり落ちるが、少年はまるで気に止めなかった。

というか、ジインはそうなってさえ目覚める様子を見せない。

「知り合いって言うか……話してる途中にちよつと待ってって寝ちゃって」

「ジインはいつもそうだよ。巫覡みこですらないのに、神をその身に宿してるんだから、しょうがないっていったらしょうがないんだけどね」

巫覡？

巫覡っていったら、神様を降ろしちゃったりして、託宣をさずけるとかいう、あれ？

キアラは思わず口許をひきつらせたが、幸いというかなんというか、少年がそれに気づく様子はない。

大地の民は戦闘能力にこそ長けているが、基本的に呪術的なものや神がかり的なもの、一種超常的なものにはまるで縁がない種族なのである。

必要に迫られて、呪医の勉学に励み、薬草学に長けた者となるものがいることはいるが、そういったものたちにしたところで、呪医らしいところといえばせいぜいが薬を調合したり病人の診察をしたりする程度で、人間やエルフなどの呪医のように特殊な力を持つ

つわけではないのである。

この人、間違いなく大地の民だよね？

それなのに、巫覡的なことをやっちゃうの？

それって……なんだろう、すごく面倒くさい予感がする！

キアラはそう認識した瞬間、ジンに助けを求めたことを後悔した。

どうしようもなく、厄介ごとのおいがする。

そんな面倒なことには関わりあいたくない。

目の前で途方に暮れた様子の少年をみつめる。

とりあえずこの少年に雇ってもらえれば、ジンとこれ以上関わらなくてもすむんじゃないだろうか。

ぺろり、と軽く唇をなめて、キアラは少年に向き直った。

「ねえ、貴女、大地の民でしょう？」

けれど、キアラが口を開くより前に。少年がおずおずとそう切り出した。

「大地の民は、戦闘に長けた種族だって習ったことがある。少しの間、ぼくを守ってくれませんか」

まったく、願ってもない展開だと、そう思った。

とお。

「私でいいなら、喜んで」

につこりと笑ってうなずくと、少年はほっとしたような顔つきになった。

「ぼくは、マーリ。詳しいことはいえませんが、今ちょっと追われていて。たぶん……今すぐにお命頂戴とかそういう物騒な展開にはならないと思うんだけど……だからといって、捕まるわけにはいかなくて。ジンとはちよつとしたオトモダチって感じかなあ。よろしく願います」

やわらかそうな金色の髪が、通りを渡る風にふわふわと揺れている。

いかにも硬そうな自分の砂色の髪とは随分な違いだ。

ちよつとうらやましいというか。

神様って生き物は不公平だと思う。

「私は、キアラ」

あにさまやあねさまよりはずっと華奢で傭兵向きではない体つき。けれど、柔らかでふわふわしているわけでもなく、中途半端な自分の容姿。

「とりあえず、追われてるんだったら、これを被って？その髪の毛は目立つから」

血のにおいも気になったけれど、追われているのなら、先に少しでも距離をとるべきだろう。

とりあえず少年マーリの目立つ金色の髪を隠してしまうべく、キ

アラは眠りこけているジンからフードつきのロープを引っぺがした。

その拍子にジンがさらに木箱からずり落ちて、ついでに壁に頭をぶつけたが。

起きる気配はなかったので、とりあえずはいいのだろう。

ロープには、ジンが焚き染めているのか、やさしく爽やかな香りが染み付いているようだった。

世界樹に見守られているような心持になって、ほんの少し心強い。

そつとその香りを吸い込んで、少しばかり不安げなマリーにっこりと笑って見せた。

「だいじょうぶ。私、大地の民ではそんなに強くないけど、ニンゲンよりは強いと思うから」

ふわりとロープを広げて、マリーを抱き込む。

小柄なマリーに、大柄なジンのロープはかなり大きいようで、裾を引きずってしまったが。

とりあえず腰の辺りをベルトで止めて、無理やりに丈を調節した。

「いこつ」

マリーは王都に詳しそうだったから、先導はまかせた。

追ってくるニンゲンがいないかどうか、警戒しながら。キアラもその後が続く。

「マリー、逃げる先は決まっているの？」

4つの通りを過ぎ、6つ目の裏道を抜けたあたりで、キアラは困ったようにそう聞いた。

マーリの足取りは頼りなく、右に逃げた後、左に戻り、結局は逃げるのに遠回りをしただけだったということが何度かあったためだ。とてもではないが、行き先が決まっているようには見えない。

キアラの問いに、マーリは泣きそうな顔つきでゆっくりとかぶりを振った。

「逃げなくちゃいけないことはわかってるんです。でも、どこに逃げたらいいのかわからない」

たぶん、年齢よりは大人びた顔つきなのだと思う。

知的な夏の空の色の瞳は、悲しみを帯びてキアラをみつめた。

「誰を信用していいのかもわからない。ジインは群れるのが嫌いな人だから、大丈夫だと思ったんだけど。あとはなにもわからないんだ」

マーリは今にもその場に座り込んでしまいそうだった。

まるで群れからはぐれて途方に暮れている、羊の子どもみたいに。切なそうにしょんぼりと肩を落としている。

とおと、ひとつめ。

「えっと……」

そんなマリーをみつめながら、キアラは軽く頬をかいた。

直接相対したことがない敵がいる場合。
まず、しないといけないことはなんだったか。

「ねえ、マリー。誰に追われているの？」

すべきことは、常にひとつ。

情報を集めること。

だれが、いつ。どこでなんのために。どのような手段をもって。

ゆっくりと問えば、マリーのまなざしは瞬間泳いだ。

隠したいことがある顔つきだ。

「……言えることだけでもいいんだけど、私は何もしらなすぎるから」

たとえば、そう。

森の中で魔獣に出くわした時に。

その魔獣が何を苦手とするのか、何を好むのか。それを知っているだけで、生存確率はぐんとはねあがる。

情報は、多ければ多いほうがいい。

敵よく知ること。

己にできることとできぬことを、きちんと理解すること。
それがすべての基本なのだから。

本来ならば、雇い主との間には、強固な信頼関係も有ったほうがいい。

けれど、自分とマーリの間にそんなものがないことは、きちんとわかってる。

たまたま、その場に居合わせた人物。
それ以上でも、それ以下でもなくて。

たまたまお互いにその相手に、ほんのちょっとした利用価値を見出したに過ぎないのだから。

マーリは少しばかり迷っているようだった。

けれど、ほどなく腹を決めたように。

夏色の青い瞳をこちらに向けた。

「おじさん、なんだ。追って来てるのは、おじさんの私兵」

「おじさん？」

「うん。おじさんは、ぼくが邪魔なんだ。だから、ぼくをいないことにしておもうとしてるんだ。町の中で何かをされることはないと思うけど、つかまったら、ぼくはたぶん。殺されてしまう」

そう語ったマーリの口調は淡々としていて、とくに悲壮感も何もない。

諦めている、というのか、なんというのか。

うまくはいえないけれど、そのことについて、格別な悲壮感なんかは抱いてはいないようだった。

「ぼくの姉さんが神殿で巫女をしているんだ。だから、姉さんのところに行こうと思ったんだけど、だめだった。神殿はすでにおじさんが掌握したあだったんだ」

大人びた口調で、マリーはさらに言葉を継いだ。

小難しい言葉を使っても、マリーはまだ幼いのに。

その背伸びをした様子はなんとなく切なくて、キアラは思わず眉根を寄せた。

とおと、ふたつめ。

「頼れる人は、いないってことか」

「うん。姉さんも多分、動ける状況じゃないと思う」

まだこんなにも幼いのに。

大人びた口を利く、この子を哀れだと思う。

けれど、キアラはあえてそこには触れなかった。

感傷にふけている暇はないのだ。

現状を嘆くのも、感傷にふけるのも、事後策を講じるのも。

安全な場所で落ち着いてから考えればいいことだ。

すべては命あつての物種なのだから。

「ジインってなにしてる人なの？」

行き先不明、敵の人数等も不明。

つかまつた場合の処遇も、最悪命に関わる。

どうしたものか、とキアラは少しばかり爪をかんだ。

とりあえず物盗りやゴロツキから、対象者を護るのとはわけが違
う。

先立つものにも大いに不安があるし、なにより自分はまだこの
地理にさえ詳しくはない。

ジインをあの場に見捨ててくるのではなかったと、今更ながらに
思う。

大地の民なのに巫覡、というそのキーワードで無駄にうるたえて
しまったらしい。

冷静に考えれば、この場で一番、この状況を乗り切る術を持って

いるのはジンだったろう。

「ジンは……」

己の浅慮を悔いても、すべては今更である。

とつと諦めて……もとい。現状を認識し、容認して。

話題を変えたキアラの問いに応えるべく。マールは口を開き、言葉を探しあぐねて再び口を閉じた。

「……なにしてる人だろう」

そうして、ぽつりとそう呟く。

え、とキアラもまた言葉をなくした。

「知り合いなんでしょ？」

「うん」

「ジンって秘密主義な人？」

言葉を重ねると、マールは困惑したようにかぶりを振った。

「その身に神を宿しているなんて、超重要国家機密並みの秘密をぼろつとこぼしちゃうくらいだから、秘密主義ではないと思う」

それはたしかに。

「というか。本当に、神様が宿った人なの？」

「何かの弾みでひろっちゃった、とか言ってたけど」

なんなんだろう。

神様って言うものは、落ちてた！ 的ノリで拾えちゃったりするも

のだっただろうか。

犬猫の類ではあるまいし。

「……冗談じゃないの？」

さらに突っ込んでみると、マールは複雑な顔つきで考え込んだ。

「でも、あのいつでもどこでも突然寝る体質って言うのは、尋常じゃないと思うんだ」

「いつでもどこでも寝る体質って言うのが、そもそも言い訳だとか」

それは、ない話ではないと思う。

もしかしたら、真実にニアミスくらいはしていたかもしれない。けれど、悲しいかな。

キアラは順番を間違えた。

こんな呑気な話は、安全地域でこそ話すべきことだったと思う。

はっと気がついてキアラが顔を上げたときには。

遠巻きにこちらを窺う気配が、ひとつふたつ、とんでいつつむっつ。

殺意とまではいかないが、敵意というか、「見られて」いる。

「ぼく、騙されてたのか……？」

「黙って、マール」

真剣に落ち込みかけたマールを制して、キアラはあたりの気配を探ってみる。

本当にうかつだった。

囲まれた。

だから、自分はいつまでたつても、未熟で。

兄や姉のようになれないのだと、ほんのすこしばかり自己嫌悪におちいる。

裏通りを走って抜けた先にある、小さな広場。

大通りを外れているから、あまり人も多くなく。

残念ながら、人ごみにまぎれて逃げるといふ、王道は見えそうにもない。

これって、もしかしなくてもピンチ？

王都に出てきて、まだ半日。

その間にこんな状況におちいるなんて、王都はなんて怖いところなのだろう。

とおと、ふたつめ。(後書き)

次回新章です。

ひとつめ。

一見して、平和な町並みだった。

裏道まできちんと整備された石畳の道。

おまけに大通りでもないのに、小さく開けた場所が作られていて、花が植えられたりベンチが置かれたりしている。

大通りほど多くはないが、そこそこある人通り。

その間にまぎれるようにして、ちらほらと。

囲むように取り巻いた、不穏な気配。

「とりあえず、ここを逃げようと思う」

「うん」

声を潜めてそう宣言すると、マリーは素直にうなずいた。

「私は地理に詳しくないんだけど、どこが一番安全だと思う？」

問えば、マリーは無言のままうつむいた。

わからない。なるほど。

「それなら、王都から離れるって言うのはアリなの？ 離れて身を隠す」

「あんまり長いことだとまずいと思う」

条件付での、許可。

まあこのまま、右も左もわからない王都で迷子になりながら逃げ続けるよりは、いささか先が見えた選択肢だと思う。

「それなら、マリー。フードをしつかり被ってね、私が追っ手をひきつけている間に、大きい方の王都を出る門にいつて」

「大きい方？ 小さい方の門じゃなくて？」

「人が多いほうが、紛れ込めるかなって思っで。私は大地の民だか

ら、マーリの匂いを追える。だから、頑張つて本気で隠れてて。絶対見つけて合流するから」

「うん」

マーリの頭をぽふぽふとなでれば、幼げな顔が少しばかりくしゃつとした。

「いい？ 今から、あっちの通りに走るわよ」

キアラが示したのは、細く長く水路沿いに走る一本道だ。

キアラたちがいる場所から走りこむほかには、しばらく合流してくる道はなさそうだ。

「私が道をふさいで追っ手を止めるわ。マーリは一生懸命走つて逃げるふりをする」

「ふり？」

「そう、隠れられる場所があつたら、そこに隠れて。私が道をふさぎつつ逃げながらマーリの後を追っていくふりをするから、私と追っ手を通り過ぎてから、その場所からでて約束の場所に行つてちょうだい。わかった？」

退却を偽装する。

難しい技術ではあるが、相手が自分たちを女子供だと侮ってくれば成功するに違いない。

大地の民には珍しいこの華奢な外見も、きっと相手に侮りを生んでくれるだろう。

「日が沈んでから、落ち合いましょう。あなたの幸運を世界樹に祈るわ」

大地の民の決まり文句を口にしてから、キアラはマーリの背をぽんぽんと叩いた。

「いくわよ」

だいじょうぶなのか、とマーリの視線が問うている。

実を言えば、自信はあまりない。

けれど、自信がないからやらなくていいということにはならない。

やるからには、最善を尽くす。
ほかに、道はないのだ。

マリーを安心させるように微笑んで見せてから、キアラは建物の壁沿いに積み上げてあった樽を通りに向かって思い切り蹴飛ばした。ちゃんと中身が入っていたようで、結構重い。

少し無理をしたが、そのまま蹴りきつてしまうと、高く積み上げてあった樽はぐらりと揺れて、地面へゴロゴロ転がった。

中身がこぼれることも予想したが、思ったよりも樽は頑丈だったようだ。

重さのせいで勢いも増し、通行人めがけてなだれていく。
うわぁ、とあちこちで悲鳴が上がった。

重い樽は結構な凶器になるようで、みんな結構真剣に逃げている。反射神経が鈍そうな幼児や、思ったように動くことが出来ない年配の人間がいなかったことにいささかの安堵を覚えた。

ふたつめ。

人の波が、くずれる。

乱れて、ざわめく。

追っ手たちが崩れる樽の山に気を取られたその一瞬に、キアラはマリーを抱えて水路沿いの通路に駆け込んだ。

一瞬遅れて。

ばらばらと追いかけてくる人影が、三つ四つ……ざつと六つ。

「行きなさい、マリー！」

背後にマリーを逃がし、キアラは追っ手の前に立ちふさがった。

背中に負っていた大剣をはずし、布にくるんだまま、両手で柄を支えたまま地面につく。

大地の民が用いる大剣が、街中でふりまわすには物騒すぎることは百も承知だ。

マリーの軽い足音が、ぱたぱたと遠ざかっていくのを、耳だけを動かして確かめる。

視線は追っ手に据えたまま、動かすことはしない。

これ、ちょっと危なくない？

思わずそんな感想を抱いたものの、表情には出さずに瞳を眇めて追っ手を見やる。

挑発するときのあねさまを真似てみたのだが、果たしてうまくいったかどうか。

心持ち顎を上げるのがポイントなのよ！と確かあねさまは言っていたような気がする。

大地の民の戦闘能力が高いのは周知の事実だから、たとえ力量が

たりないと自分で悟っても、相手を威嚇することでびびらせようという作戦なのとか。びびって引いてくれれば御の字。もし引かなくても、恐れを呼び起こすことが出来れば、数割は力をそぐことが出来るらしい。

だけど、あねさま。

どう鼻屑目に見積もっても、この力量の傭兵6人相手はきついです……

ていうか、ムリだから……！！

互角に戦えるのは二人まで。

三人だと、負けないように立ち回るのがなんとか。

それ以上だと、死なないように逃げられればいいなーという感じだろうか。

「邪魔をするのか、大地の民よ」

リーダー格らしき髭面の男が一步前に歩み出る。

マリーはもう、隠れただろうか。

これは逃げるふりじゃなくて、本格的に逃げないとまずそうなのだけだ。

うまく隠れることが出来ただろうか。

内心でマリーの身を案じつつ、キアラはふんと鼻を鳴らして見せた。

「邪魔も何もないわ。あなたみたいないい年したおっちゃんが、あんな小さくていとけない子供を追い回すなんて悪趣味が過ぎるわよ」

「悪趣味だろうかんだろが、仕事は仕事だ。受けたからには全力で当たるのが本職だ」

「ということば、自分でも悪趣味だつて思つてゐることね」
くす、とわざと煽るようにキアラは笑う。

「私たちの剣は、弱者を虐げるためのものじゃないわ。剣を持つものとして恥を知つたらどうなの。本職なら本職らしく、強者と戦う剣を持ちなさい」

まあ、キレイごとで世の中渡つていけないらしいけどな。

あねやあにが、自分にそう諭したあとでいつも自嘲的に呟く言葉を胸の中で呟いてみる。

雇われて剣を振るう以上、意に染まぬ仕事もあるし、時には誇りを殺して汚れ仕事を引き受けることもある。——そう、マリーのような幼子の命を奪うことさえ。時にはあるのだろう。

「ろくに仕事を引き受けたこともないらしい新米の傭兵が。いつまでそのきれいごとを通せるかみものだな」

吐き捨てるように返した髭面が口許を歪める。

どうやらキアラが思っていたよりも、まっとうな傭兵だったらしい。

自覚している汚さを衝かれて、その頬に自嘲がもれていた。

「金をもらつた以上、どんな仕事でも全うすべきだ、幼きもの——その幼さに免じて、素直に退くなら見逃してやろう。下手な義侠心は怪我のもとだぞ」

髭面はたぶん、ちよつとばかり格好をつけた。

その言葉は確かに正しくて、そんなことはキアラにだってわかっている。

髭面が思っているよりも、大地の民ははるかに傭兵家業に精を出

す一族なのだ。

時には雇われ主がちがうがために、兄弟ですら剣を交えるほどに。

キアラはにつこりとくちびるを笑みの形にひいた。

うまい具合に髭面が乗ってくれたおかげでいい時間稼ぎが出来たと思う。

後ろの傭兵たちが焦れて攻撃してこない間に、次の段階に進むとしよう。

みつつめ。

「私も一応雇われの身なので。はいそーですか、というわけにはいかないのよ」

くちびるをぺろりと舐めて、布にくるんだまま地面につけていた剣先をわずかに浮かせる。

兄さまや姉さまたちなら、片手であつかえるこの大剣だが、キアラの手には少しばかり大きい。見た目に比例して重量もあるこの剣を、キアラはいつも、身体で持って振るう。

「よつと……せいっ！」

少し、多少、いやかなり？

間抜けとも思える掛け声をかけて、キアラは大剣をそのまま上段に振りかぶった。

そしてそのまま、重力に引かれて落ちる剣の勢いに任せて振り下ろす――のだが。

ほんのわずかに加減をして、気づかれない程度に勢いを殺した。本来であれば、地面を割る勢いで振り下ろされるはずの大地の民の大剣は、軽く地面をえぐっただけで止まる。

うまく加減、出来るといいなあ

6人相手はさすがにしんどい、が。

マリーのこともあるし、ここはあまり負傷せず、かつ。不自然でないように戦略的撤退をしたい。

できれば、あまりにも力量の差が歴然としているので逃げました！ 的状况を演出したいところである。

あまりこの場で命を懸けました！的なやり取りはしなくなかった。敵の勢力がこの6人だけとは限らないのである。余力はなるべく残しておきたい。

ここで死力をつくしたとしても、マリーを護れなければ意味がないのだ。

や！と気合の声をかけて、今度は左から右になぎ払う。

ステップを踏んで後退した髭面に迫り、剣の軌道を手首の返して今度は右斜め上段から左下へ斬り下ろした。

まずい、と思ったのは、基本的な動きであつたにもかかわらず、なぜか不意を衝かれたふうの髭面が応戦しようと剣戟を仕掛けてきたからだ。

けれど、髭面の攻撃よりも、キアラの斬り下ろしのほうがわずかにはやかつた。

野にある猛獣妖獣魔獣の、鋼のような毛皮さえ重さと勢いに任せて一刀両断にする大剣である。

一般的な傭兵の細剣が、その大剣の攻撃に耐えられるはずもない。

だけど、だけど止まらないのよ！！！！

戦略的撤退をもくろむキアラとしては、ここで敵の戦力をそぐのは歓迎しない。

もし万が一、チキンな心臓の傭兵なら、リーダー格の髭面の剣を折られたことで、逆上して破れかぶれで向かってくるかもしれない。

やば、と思ったときにはもう遅かつた。

キアラの大剣は、軌道上に無造作に置かれた髭面の剣を、あまりにあっけなく砕いたのである。

ぽかん、と髭面が。後ろの傭兵たちが、澄んだ音を立てて飛んでいく、折れた剣先を目で追った。

ここでキアラにとって、嬉しい誤算だったのは。

まだマジメな傭兵が一人混じっていたことである。

ぽかんと剣先を追った髭面と4人の傭兵たちを尻目に、マジメに応戦してきた傭兵が約一名。

キアラの剣先が地面をえぐったところで、冷静に大剣の軌道外のところを狙ってきたのだ。

とつさに頭を後ろにそらしたキアラの鼻先を、冷たい銀の輝きがかすめていく。

大剣を振り上げて応戦するキアラの攻撃を、決して真っ向から受け止めることはせず、うまく流してさらに仕掛けてくる。

大剣と細剣の立会いのお手本のような攻防だ。

2・3合剣を合わせていると、やっとわれに返ったほかの傭兵たちも、慌てたようにこの攻防に参加してくる。

キアラの戦略的撤退作戦は、マジメな傭兵のおかげで、うまい具合にいきそうな雰囲気だった。

よつめ。

よし、と心の中で頷いて、キアラは数歩分を後ろに飛び下がった。そろそろちょうどいい頃合だろう。キアラ自身も、相手方の傭兵たちも、お互いに息が上がっている。なるべく息を整えるべく、深い呼吸を心がけながら、キアラはじりじりと後退った

薄い切り傷ができているのか、腕も頬も少しばかり痛痒いような気がした。

けれど、今。確かめている時間はない。

お互いに見合つて、息をつめて。相手の隙を窺つて。

それはほんの一瞬だった。

原因はわからない。

ただ、お互いに深く息を吸える時間があつた、それだけだ。相手は呼吸を整えるために息を吸い、キアラはそのわずかな時間を退却にあてた。

片手に大剣をぶら下げたまま、視線は傭兵たちに据えたまま、横向けに後退していく。

少し距離を稼げれば、背を向けて走り、追いつかれそうになればまた応戦する。

それをくりかえし、くりかえし。

幾度繰り返したかわからぬうちに、マリーの匂いが濃くするところを通り過ぎた。

時間的には、そう長い間ではなかったかもしれない。

追っ手がマリーに気づかぬことを確かめ、安堵し。

どこかで剣を調達したらしい髭面と幾度めかに剣を合わせた瞬間それは来た。

ぐらりと揺れた視界。

手足から力が抜け、大剣ががらんと鐘のような音を立てて地面に転がる。

「……なに……？」

まっすぐに立っていることができないのだと、キアラはすぐに自分の状態を理解した。

「やっと、きいてきたか」

悪役さながらの台詞を髭面が呟いたが、いかんせん上がりまくった息の合間に吐き出された言葉ではイマイチ迫力がないと思う。

「大地の民はバカみたいな体力と、怪力と、毒草への耐性を持つてゐるって聞いてたが本当だったんだな」

もしかすると、傭兵の中の誰かが、剣に毒液でもぬっていたのかもしれない。

綺麗ごとばかりが好きな守士とは違って、傭兵は目的のためには手段を選ばない人種が多いのだ。

全身の痺れと、動悸息切れめまい。

そんな症状が出る毒草は数種類あるが、自分では特定も出来なかった。

もつとも、特定できたところで。

毒消し草などもってきてはいないのだけれど。

油断した、とわずかに自嘲もしてみたり。

深く息を吐き出して、揺れる視界の中で、髭面をにらみつけてみた。

傷つけられたのは自分の力量不足が問題で。そこに毒草が塗りつけてあったからといって卑怯だとかなんだと言うつもりは毛頭ないし。命乞いをするつもりもない。

大地の民らしく。誇り高く最期を迎えたいと思うばかりだ。

ただ、気になるのはマーリのこと。

あの子は無事に逃げられるだろうか。

さっき見捨ててきたジンと、うまく合流して逃げられればいいのだけだ。

いつつめ。

膝から力が抜けて、もうたっていることさえも出来ない。

キアラが震える膝をついに地面につこうとしたとき、横合いからのびてきた力強い腕がキアラの腰をさらった。視界の端をかすめた、二の腕の複雑な紋様。心地よく香った、世界樹のにおい。

「なにをしているんだ、キアラ」

背中が人肌にぬくい。

腰を抱えられているせいか、からかうような低い声音が、体の底に響く。

「ここは森でもなければ、仲間内でやってる遊びでもないぞ。失敗すれば、死、あるのみだ」

声が近い。

あたたかな息が、耳にかかって、なんだか背中がぞくぞくする。

「わかってる、けど」

自分の声は、ちゃんと言葉になっているのだろうか。

舌が痺れて、なんだかひどくしゃべりにくい。

「わかっていないだろう。手段を選ばなよ。命を奪え」

森から遠く離れていても、王都でも。大地の民は、やはり大地の民で。知り合ったばかりだとしても、大地の民の兄らしい性質は万国共通らしい。

兄や姉たちが言いそうなことをジインも淡々と諭すようにいった。肯くかわりにキアラが息をついた後、ジイン、と呟くようにくちびるを動かせば。

なんだと低く声が返った。

「マリーは……？」

「その辺りにいるんじゃないのか」

「あの子、を」

「お前のほうが現在危機に面していると思うんだけどねえ」

マリーを頼む、といったかったのに。

ジインの返答は素っ気なかった。

風向きが変わったのか、マリーが遠く離れたのか。

マリーの匂いはもうしない。

身体に力が入らなくて、だらんとジインの腕に抱えられたままだらけていると、ジインが呆れたように息を吐くのがわかった。

「おい、あの前向きすぎる質問はどうしたのよ？」

髭面を始めとし、傭兵の面々をまるで無視したその様子で、ジインはそのあたりに転がっていた木箱にキアラを座らせてくれた。

ほんの少し眉尻を下げて困ったように聞いてくる。

何の話だと視線で問えば。

「選択は二択。もとから助ける気なのか、今助ける気になったのかってあれだよ」

ぽふぽふと大きな手でキアラの髪をかき回し。

ジインは空いた手で地面に転がっていたキアラの大事な大剣を拾い上げた。

「答えは起きてからって言っただろ？」

キアラには大きすぎるその剣も、ジインが持つとちょうどいい大きさに見える。ならすように一振りしたあと、ジインは剣を片手で

構えて、いささか横柄に傭兵たちを見渡した。

むつつめ。

「おれのかわいい妹になんてことをしてくれたんだ。もちろんそれなりの覚悟は出来てるよな？」

特に脅すふうでもなく。

平板な様子でジインはそう言った。

けれどジインが大剣を持つと、やはり迫力が違うらしい。

傭兵たちは圧されるようにじりじりと後退し、髭面が「妹だと？」

！と情けない声を上げた。

「眠り男に、妹がいるなんて話は聞かないぞ?!」

「残念だったなあ。大地の民に、妹がいないなんてことはありえないんだよ」

傭兵たちの反応を見るに、実はジインは有名人なのかもしれないと、ちらりと思う。

「大地の民は種族全体が家族のようなものだからな。血がつながってなくても妹なんだよ」

気負うふうもなく、ジインは一步前に歩み出る。

何気なくひとふりした大剣が、風を斬って唸った瞬間。傭兵たちの剣が弾けて飛んだ。

「おれはキアラと違って手加減はしないよ？面倒だから」
宣告しながら、剣をもう一閃。

キアラが使うような派手な動きも体術もないけれど。

ジインは確かに剣の一振り一振りで、確実に相手の戦力をそいでいくらしい。

ただ手加減はしないといいながら、一撃で殺してしまわないあた

りは、優しいと言っのかなぶっているというのか、殺すといいながら後始末をめんどくさがっているというのか。

ジインは正確に傭兵たちの剣を折り、鎧を切り落とし。

やがて、その恐怖に耐え切れなくなった傭兵たちがばらばらと逃げていくのを、ジインの背中越しにキアラはぼんやりと見送った。意識をなくしているわけではないが、毒が回ってきたのか思考の方までしびれてきたような気がする。

特に退散していった傭兵たちの後を追うでもなく、ジインはその背を見送り。

こちらに引き返してくると、キアラの頬や腕にできた小さな傷を検分するように手を添えてじっとみつめた。

「傷はそう、深くないねえ。やっぱり毒か。まあ、きついのでなくてよかったけどさ」

視界に映るジインが、わずかに口の端を曲げる。

「ジ、ン」

「どしたよ？」

ジインの温かい指先が頬の傷をなぞった。

「……女の子なのに、顔に傷なんか作っちゃダメじゃないか。いくら大地の民が戦いの民だから少々の傷は気にしないといってもさ。ないに越したことはないんだよ？」

思考が散漫で、言葉を紡ぐこともできないでいると。

沈黙を埋めるようにジインはそんなことをいった。

人間とは違う、大地の民の暖かさ。初対面でも、ずっと親しんで

いたような。なつかしさ。

王都にきてから、ずっと張り詰めていた心がこんなところなのにほぐれていくようだ。

それが心地よくて、じつとジインを視界に納めていると。なぜだかジインの整った顔が視界いっぱいひろがった。

顔を近づけてきたのだと、理解したのは一瞬あと。何のためにと疑問を覚えたときには。

あたたかくてしめったなにかが、頬に傷にふれていた。

「動かないの。おれ、今薬もってないんだからさ」

消毒のかわりだとそういつて、ジインが傷口を舐めていく。ぴりぴりとした痛みと、舌の熱さと、ぞくぞくする背中と。

そういえば、転んで怪我をした昔。

剣の稽古をしている途中に負った傷。

近くにいた兄や姉たちが、よく傷を舐めてくれたと思う。

大地の民の唾液は傷の治りを促し、毒を清めると、昔からよく言われている、のだけれど。

「ジイ、ン……」

ジインは大地の民の、会ったばかりだけれども兄の一人で。それなのに、背筋を変な感触が駆け抜ける。

「こら、動くな。腕はともかく、顔は自分で舐めらんないでしょ？」

どれだけ、時間は過ぎたのだろう。

ぞくぞくするその感触と熱さをひたすらこらえて。

ぼんやりとした思考がようやく働きを取り戻してくるころには。もつともな理由を告げられた頬の傷はもちろん、腕の傷もきれいにジインに消毒されたあとだった。

「とりあえずさ、質問に答えると」

ぺろりと唇を舐めて、ジインがこちらを見下ろしてくる。

「おれは王都で天涯孤独の身の上ということになっているし、もう森に戻ることもないだろうけど、一応大地の民の端くれだし。おまえを助けるのもやぶさかじゃないと思うよ。ひまだし」

なんて回りくどい言い方をするのだと。

助けてもらう身でありながら、キアラは思った。

ななつめ。

「さて、と」

助けるという趣旨をキアラに伝えたジインは、もしかすると少し満足したのかもしれない。

わずかに顎を引くと、端正な顔にキレイな笑みを浮かべて見せた。キアラは一瞬それにみとれ。ありがとうと告げる機会を逸した。ぽふぽふと頭をなでたジインが、立ち上がるついでに——そう、本当にそんなごく自然な成り行きでキアラのことを抱き上げたせいだ。

ふわり、と頼りない浮遊感に襲われて、キアラは目を見張る。

「え、ええええっ?!」

浮遊感は一瞬。

ジインの腕に座らされるような形で、キアラにはすぐに安定感をもたらされた。

自分の足が地面につかない頼りなさは、がっしりとしたジインの体躯によって代替される。

「なにになになにつ?!」

「おとなしくしてないと、肩に担いじゃうよ?」

「そ、そうじゃなくて!」

幼子を父親が抱き上げるようなものだ、頭のすみでは理解していても、感情が追いつかない。

傷を舐められることも、抱き上げられることも。

昔はよくあったが、成人に近づくにつれ兄も姉もしなくなってきた。

たのだから。

久々の出来事に、ついでにジインをほとんど知らないということも重なって、心臓がなんだかばくばく跳ねまくっている。

「あの、ジイン？」

最初こそ、ジインを兄さまと呼び、言葉も丁寧に使っていたが。そんな丁寧さは今はどこへやらだ。

話の途中で寝てしまったジインに対する苛立ちが最初はそうさせて、今は動揺のためにぶつ飛んでいる。もっとも、キアラが自分のそうした心の動きを整理できるのはもう少しあとになるのだけれど。

「どうした？」

「なんで、抱っこしてるわけ？」

「なんでって」

片手でキアラの体重を支えるジインは、あいた右手でキアラの大剣を己の背中へ担いだ。

「今、歩けないだろう？」

「ちよつと待つてさえくれれば……」

そうきつい毒ではなかったみたいだし、今はもう舌の痺れも薄れてきている。

「おれが動けるのに、わざわざこんなところで呆けている必要もないじゃないか。大地の民が助けて護ると決めたなら、それは最後まで貫かれてしかるべきだ。そうだろ？」

「それはそうだけど……」

キアラだって、一度助けると決めたら最後まで頑張る。自分の命だっていとわない。己の決意と誓いをなによりも優先する大地の民だから。

けれど。

「私だって、大地の民なんだから。マールを護るって決めたし、私がジンに助けられてばかりって言うのは、なんだかちよつと……」言葉を濁すと、ジンはなぜか不審げな顔をして眉を寄せた。

「おまえさ……いくら財布を失くしたとはいえ。同族の、それも男に女が助けを求める意味をわかつてるのか？」

「……え？」

困ったから渡りに船とばかりに、通りがかった同族の年上の兄に助けを求めたのだが。

何か悪かったのだろうか？

「……ちよつと、失礼」

ジンに当惑したまなざしを向けると、ジンは眉を寄せたまま一瞬動きを止め。

空いているほうの手で、背中の中ばまで伸ばしたキアラの金茶色の髪を慎重な手つきでそつと横に避けた。

「え？なにになに？？」

キアラはジンの腕に腰をかけるような形で抱き上げられていたため、ジンの肩先に身体を押し付けられるような格好になってしまふ。

驚いたような声を上げたが、ジンは何か目的があるらしく。

そのままくいつと衣服の襟首をひっぱった。

「うひゃ」

おもわず変な声があがったのは本気で驚いたためだ。

「ジン？！」

「いや……本当に成人おとなだよな？と思ってさ……」

「失礼ね！ちゃんと成人の儀だって済ませたわよ！」

噛み付くようにキアラは抗議したがジンの表情は複雑なままだ。だが、その行動の意味はちゃんと理解した。

成人の儀で男は二の腕に自分で刺青を彫るが、女は首の後ろに、一番親しい姉に彫ってもらうのが一般的なのだ。

どうやらジインは、何らかの理由があつて、キアラが本当に成人しているのかを確かめたかつたらしい。

「まあいいか」

首をひねりながらも、ジインは無理やりに自分を納得させたらしかつた。

理由はわからなかったが、ジインに説明するつもりはないらしい。「とりあえず、おれ、寝足りないんだよね。マールはうまく逃げたみたいだし、しばらくはほつといても大丈夫だろう?」

先ほど話の途中で眠ってくれただけではまだ足りないらしい。

あふ、と緊張感のないあくびをひとつして、ジインは確かな足取りで、キアラが傭兵たちと戦いながら逃げてきた道を引き返し始めた。

やつつめ。

「ところで、マールは逃げたみたいだけど、待ち合わせはしているのか？」

ジンがそう問うたのは、水路沿いの道に飛び込んだ例の裏通りに差し掛かったときだった。

キアラが力任せに蹴飛ばした重い樽を片付けている屈強な男たちが数人。きちんと積んでおかないから小柄な娘がぶつかっただけでなだれるんだと、持ち主らしき髭の親爺が怒鳴り散らして怒っていたのを聞いて、キアラはほんの少し申し訳ない気持ちになった。

ただ、幸いにも、壊れた樽も怪我人もないらしい。

本当によかったと胸をなでおろしていれば、ジンがかすかに笑った。

「よかったな」

「え、あ。……うん」

ジンの逞しい肩に手を置いてバランスを取っていたキアラは、なんととはなしに恥ずかしくなってうつむいた。
なんだろう。

ジンのやさしげな黄金色のまなざしが、妙に落ち着かない。

「あ、マールなんだけど」

そわそわと辺りを見回したキアラは、空気をかえるべくそう話を切り出した。

「日が沈んでから、大きい門の辺りで落ち合うことになってるの。匂いを頼りに探すといってあるわ」

「数刻、間がありそうだな」

ジインはうなずき、目を眇めて太陽の位置を測った。

昼時は過ぎたとはいえ、夕方までもまだだいぶ時間が有りそうだ。
「おれたちが今の時間から門の辺りに行けば、目立ってマールも隠れにくいだろう。宿で少し休むか」

「宿？」

どうせ泊まるわけではないのだ。

どこか定食屋のようなところで、少し休憩するくらいでいいのではないだろうか。

「おれの起きていられる時間がもうあまりないんだ。少し眠らないとまずい」

キアラの視線に疑問を感じたのか、ジインはそう説明を加えた。

けれどキアラにしてみれば、さらに疑問が深まったようなものだ。
起きていられる時間、という定義は普通ないように思う。

夜中ならともかく、いまはまだ陽も高いのだ。

——神をその身に宿しているひとだから。

ふと、耳によみがえる、マールの声。

嘘かとも思ったけれど、そもそも大地の民はあまり嘘を好まない。
とても精緻な、神代の祈りをその身に刻むほど、大地の民らしい
ひとならば。そもそも嘘でない可能性のほうが高いのかもしれない。

大地の民に、神が宿するという、その不自然さよりも。

ジインが嘘をつくほうが。なさそうな気がしたのだ。

「起きていられる時間って、どういうこと？」

マールから聞いたことは、知らないふりをして。キアラはジインに質問をぶつけてみた。

当人から聞くほうが間違いが少ないというのもあるが。単に直接その答えを聞いてみたかっただけだった。

答える前に、ジインは一瞬キアラをみつめた。きれいなきれいな、黄金色の瞳。細い瞳孔が、まっすぐにキアラに向けられる。

キアラを抱えたまま、すいすいと人波を歩いていきながら、ジインは短い時間で言葉を吟味しているようだった。

「キアラは、神代の物語を知っているよな？」
「え、うん」

質問の答えとは違うことを問われて、キアラは戸惑いながらもうなずいた。

まず、はじめに。
ただ、虚無うつろがあった。

在った、というよりも、そこにはなにもなかった。けれど。

それを知る存在ものさえ、いなかった。

たゆたう、無。
時間さえも流れぬ、なにも存在しえぬ虚無うつろ。

ただ在りつづけた、虚無うつろは、ある日。はじめて己という存在を知った。

空ろなる存在もの、創世はじまりの神、セリヌンティウスの誕生である。
創世の神は、上をみつめ下をみつめ。右と左を見渡したため。
天地が生まれて、距離と時間が生まれた。

けれど、創世の神はまだ、ひとりだった。

創世の神は、己が孤独に涙する。

涙はこぼれて、混沌^{うみ}となった。

涙、其は儚きもの。

いのちは生まれて散っていく、死すべき宿命の神子、ケイオスが生まれた瞬間だった。

ひとりでなくなったことに、創世の神は喜び、光が生まれ。

やがて散りゆくその命、その未来を嘆いて闇が生まれた。

昼と夜が生まれ、死すべき宿命の神子から分かれた数多のものが、育って散っていった。

これが、創世の物語である。

小さいころからだれもが暗記させられた物語だ。

キアラが諳^{そと}んじてみせると、ジインはかすかにうなずいた。

「この世界は、死すべき宿命の神子そのものだといえる。神子が死すべき宿命をもつように、世界もまたいずれ終焉を迎える宿命にある」

「……うん」

一応、習う世界ではそういうことになっている。

けれど、それを信じている人が世界にどれだけいることか。

しよせん、それは神代の物語なのだ。真実とは、また違う。

「まあ、いろいろあったんだけどさ。おれはなぜか、その死すべき宿命の神子の欠片を宿しているんだ」

「はあ……」

ジインはマジメな顔つきで説明をしてくれたが。

神がかり的なものとは一線を画す生粋の大地の民であるキアラと

しては。

ましてや、思いっきり内容を省略されたその答えでは。
どこかうろんな眼差しをジーンに向けることしかできなかった。

IIIのつめ。Side:ジン(前書き)

今回はジン視点での話となります。ふたつみつつ続く予定です。

このつめ。Side:ジン

疑ってるなあ……

大地の民にしては、華奢で小柄な金茶色の髪の娘。

黄金色の瞳は、大型の猫科の獣のようで、かわいらしいと思う。

先ほど知り合ったばかりのこの娘——キアラは、ひどくうるんな眼差しをこちらに向けていた。

おれだつてさ。

ふつーに、神様がこの身に宿っているんです、と言われたらこういう反応をすると思うんだ。

いや、もしかしたら、もっとひどい反応をするかもしれない。

「待って！」

最初に声をかけられたときは、空耳だと思った。

あいにくと王都ディインに、大地の民の知り合いは誰もいない。普通の知り合いだってほとんどいない。

知り合いといえるのは、なんだか後ろ暗い係累がやたらとありそうなのに、美少女のような外見をしたマーリという少年くらいなもので。

あとは知り合いとさえいえないような、顔くらいはしってるかもー？というような関係ばかりだ。

「待つて、お願い。あにさま、待つて!!」

あにさま、という単語に無条件に体が反応した。

誰が決めたか知らないが、大地の民は皆家族、という主義の下。年長の男はみなあにさま、女はあねさまと呼ぶ風習があるのだ。

王都にきてからこそ、自分をそんなふうに呼称する相手はいなくなったが、昔はあにさまとよく呼ばれていたものだ。——その過去が、足を止めさせた。

厄介ごとには、極力関わりあいたくなかったにもかかわらず、だ。

その瞬間、目深に被っていたローブをつかまれた。

大地の民の外見は、王都で悪目立ちする。その特徴ともいえる獣のような耳を隠すために被っていたローブが、引っ張られた衝撃ではらりと落ちた。

「……大地の民？」

思わず不審げに娘を見やってしまったのは、大地の民としては、あまりに小柄だったせいだ。

本当に成人しているのか？とさえ思ったが、そもそも大地の民は成人しないうちは森から一步も外へ出してはもらえないものだ。よほどの事情がない限りは。

その背に、体格に不似合いに大きな剣を背負っているのも、成人の証かもしれない。

「あにさま」

弾んだ声で、キアラは言った。

キレイな黄金色のまなざしが、期待に溢れてキラキラと輝いている。

なんて無垢な表情だろう。

その真っ白な笑顔が心に刺さる。なぜか心臓がどくんとばかりに

大きく跳ねた。

「あにさま。私はキアラといいます。お願いします、助けてください、困ってるんです」

逃がすものかとばかりにキアラはロープを握る手に力をこめて、必死な面持ちでそんなことを言った。

はあ、と間が抜けた声を上げてしまったのは、しょうがない。同族の娘に助けを求められるとは思わなかったせいだ。

「ね、あにさま。困ってるんです」

確かに、困っているふうではあった。

けれど。なぜにそこで、助けてくださいというのか。判断を下しかねて、ただ瞬いた。

「おれは、ジインと言ったが……」

一応名乗りを返しながら、思ったことはただひとつ。とりあえず、落ち着こう。それだけだった。

とお。Side:ジン(前書き)

ジン視点、二つ目の話になります。

とお。Side:ジン

とりあえず大通りで話すような内容ではないだろうと思い、キアラを裏道へと誘導すれば。

お前に警戒心とはないのか?!と突っ込みたくなるくらいの素直さで、ぺたぺたとついてきた。

途中、目が釘付けになっていた屋台のよく冷えた果実水を買ってやれば、本当に嬉しそうににこりと笑う。

こくこくと子供のように果実水をのむキアラをみつめながら、こぼれるのはただ困惑の溜息ばかりだ。

まったく、森のやつらもどうかしている。こんな子供を王都にほうりだすなんて。

まだ同族の自分だったから救われている部分もあるだろうが、性質の悪い人買いなんか目をつけられたら、一体どうするつもりなんだ。

平和な森ではまだ知らないかもしれないが、大地の民は結構な高値で売買される。

扱いとしては、力もある風変わりな奴隷やペットだ。

もつとも、困惑の種はそれだけではない。

「なんで困ってるんだ」

そう聞いてやれば、キアラはなぜかおいしいですと果実水の感想を述べた。

そしてそのあと、キラキラした目で果実水をうつとりとみつめる。お前は困ってるんじゃないかったのかと少し突っ込みたかったが、

とりあえずは何も言わずに見守ることにした。

こんな田舎から来ましたと看板をぶら下げて歩いているような娘、どうせ財布をなくしただとか、因縁をつけられて大金を要求されたとか、道に迷ったとか。

困っていることを予測するのは、はつきりいつて容易い。それを助けてやることも、まあそう難しいことではない。

いくらかお金を貸してやって、なんなら森の近くまで送ってやればいいのだ。

「助けて」と同種族の女に言われたことに比べれば、まったくもって簡単に解決することである。

大地の民は、強いことに重きを置く一族だ。

強いことが正義だし、ひとに助けを求めることなんてまずはありえない。

女にしても、強いことを第一に考えるし、伴侶を選ぶ時にだってそれはもちろん考慮に入れられる。どんなに気のいい奴だって、弱ければそれだけで『対象外』なのだ。

そんな女が、誰かに助けを求める時。

その誰かは、必ず自分よりも強い、伴侶。もしくは、伴侶候補——人間風に言い換えるなら。婚約者にほかならない。

特定の相手以外に弱みを見せることは恥なのだ。

もし、それ以外の相手に助けを求めるのならば。

それは、伴侶になってくれといっているようなものだといえど。ジインのこの困惑も、理解してもらえるかもしれない。

逆に、乞われて手を貸す——助けることは、求婚を受け入れたということになる。

人間からしてみれば、馬鹿らしいような風習だと、最近では思う

けれど。

思うけれど、実際に同種族の女から助けを乞われれば、困惑は深まるばかりだった。

うつとりとした顔つきで、キアラは果実水を堪能している。

まだこれが、しっかりとした成人の大地の民の女なら、ここまで苦悩しなかったかもしれない。

自分のいつていることははっきりとわかっているだろうし、こちらに対処のしようがある。

けれど、この娘は……

とりあえず、自分がいつてることわかっているか？と胸倉でもつかみあげて問いただしたい気分だ。

一通りの可能性を検討してみたものの、どうしようもないの一言に尽きる。

溜息をひとつつき。

ぐらぐらと視界が回っていることに、遅まきながら気がついた。まずいな、と冷静に状況を分析する。

神の欠片を宿すという事実は、思ったよりも身体に負担を強いるらしく。一定時間以上を起きていることができないのだ。

根性とか誠意とか、そういう問題ではなく。

一定の時間を過ぎれば、強制的に眠りがやってくる。

いつもなら、体調を気にしながら行動し、こんな街中で休眠に陥るようなことにはならないようにしているのだが。

自分で思っていたよりも、キアラの登場と助けて発言に動揺していたようだ。

「私、お財布をなくしちゃって……」

果実水を口に含みながら、ようやくキアラがそう切り出したときには、もう眠気が限界までこみ上げてきた。ここまでの眠気はもはや暴力だとも思う。

こらえきれない眠気をあくびで逃がそうとしたら、大あくびの最中にキアラとバツチリ目があつた。

キアラの瞳がたちまちに非難一色に染まる。

ごめん、と思うものの。

こればかりはもう、どうしようもないのだ。

とおとひとつめ。 Side:ジン

けれど、ちょうどいいかもしれないと。

キアラの非難の眼差しを受けながら考えた。

この混乱しまくった思考も、一眠りすれば、少しは落ち着くはずだ。

「ごめんね」

あまりにも信じられないという瞳をキアラがするので、一応謝ってみると、なぜだろう。その表情はさらにきつくなってしまった。もうひとつ、こらえきれないあくびをすると。

キアラが何事かを呟いた気がした。

「なんか眠くてさ」

なんかというよりも、もはや殺人的に眠い。

眠すぎて頭痛さえするし、なんだか吐き気ももよおしてきた。

視界も先ほどよりぐるぐるまわるし、もう眠いというよりかは気持ち悪かった。

「それで、なんだっけ」

思考が散漫になって、なにを考えていたかさえわからなくなりそうだ。

とりあえず、目を閉じて、すべての感覚を遮断してしまいたい。

そうすれば、きっと楽になれると思う。

けれど、わかっている。そうすれば、そのまま眠りに落ちて、しばらくは目覚めないはず。

一応は、ちゃんと考えるということをこの娘に伝えておかなければいけない。

あくびがとまらない。

体が休息を欲している。

キアラの言葉も、半分くらいしかもう耳にはいつてこない。

けれど。

もうひとつ大きなあくびをして、今にも閉じそうな目をキアラのほうに向けると。

なぜかキアラの子猫のようにかわいらしい顔が、目の前にあった。もうあとわずかに身を乗りだせば、くちびるが触れるほど。

どきん、と胸がなる。

息がかかる。

眠気も一瞬、遠のいた。

「かわいい同族の妹の窮地を。もともと助ける気だったのか、それとも今、助ける気になったのか、ということですよ」

くちびるを尖らせて、キアラはそう言った。

これはもう、あれだろうか。

キアラが助けてと大地の民が言う意味を、理解していようがいないが、いただいちゃってもいいパターンというやつだろうか。

あいにく、今まで生きてきて一目惚れなんぞというものはしたことがないが。

これはもしかすると、近いパターンなのかもしれない。

「なんだか、すごく、前向きな質問だな。助ける以外の選択肢はないのか？」

からかう様子をつくるって、一応念のために聞いてみる。
どうしても助けて欲しいのだと、そういうつもりじゃなくても、
聞いてみたかった。

「絶対に助けてくれると、信じていますから」

けれど、キアラはきっぱりとはっきりと、そう肯定してくれる。

それならもう、迷うまい。

もしそんなつもりじゃなかったの、と言われても。ひっくり返せるくらいにはがんばってみようかなとガラにもなくそんなことを思った。

けれど。

とりあえず、少し眠ろうと思う。
キアラには悪いが、もう限界だ。

「まあ、あれだ」

おれが絶対に助けてやるから。
ちよっとまってくれ。

「おれ、眠いからちよっと寝るわ。悪いけど、その話はまたあとで
な」

キラキラと期待をのせてみつめてくるキアラに、やっとの思いで
そう告げた。

「おやすみ」

起きたら、何とかしてやるから。
なんで王都にでてきたのだとか、そういうことも含めて、ちゃんときいて、解決してやるから。

呆然としているキアラに心の中で謝りつつ。
片膝をたてて、顎を乗せた。

必死の思いであけていたまぶたをおろすと、がくんと引き摺り下ろされるような感覚が襲う。

『よう、かわいい子がいたのか？』

深い深い、意識の底。

真っ暗な心の、自分でさえも意識できないような場所で、皮肉げな顔つきをした男がにやにやとわらっているのがわかる。

ケイオス。

なぜか拾ってしまった、死すべき宿命の神子の、その欠片。

『まあ、ほっとけないふうではあるかな』

意識は半ば同化しているようで。

ケイオスの考えは、なんとなくわかる。

たぶん、ケイオスもこちらの考えも、感情も手にとるようにわかるのだろう。

言葉を返せば、そうか、と面白そうに肯いた。

『それなら、眠りを分割してやるつか』

いつもよりも、はやく休眠から目覚めさせてくれるということか。体の負担は大きいが、キアラのことも気になるから、それは助かるかもしれない。

けれど。

ケイオスが、そんな申し出をなんの意味もなくしてくると思えない。

『欠片が降るぞ』

警戒して様子を見守っていると。
にやり、と笑って。

ケイオスはそんなことを告げた。

『巫女は予知して、王族はそれを知る。——ほら、還れ。あまり時間はないぞ』

押し返されるような、弾かれるような、そんな感触。

意識は眠りから放り出されて、気がつくと、先ほどの場所で木箱から落ちていた。

ついでに被っていたローブが消えている。

ほんの一言二言、ケイオスと言葉を交わしていただけだったのに、現実の時間はそれよりもだいぶんと過ぎているようだった。

キアラの姿はなく、かわりに、マーリの残り香がした。

とおとひとつめ。Side: ジーン（後書き）

今回でジーンサイド終了予定だったので……
すみません、次話もジーンサイドになります。

とおとふたつめ。Side:ジン

マリーが来たのか、とジンは空気に残る匂いをかいで考えた。仕事で時折立ち寄る神殿の、筆頭巫女の弟だと聞いたことがある。まるで少女のような面持ちをした利発な少年だが。

マリーの周りはいつでも少しだけ不穏な空気が満ちている。不憫だと思つて、かまうこともあるし、マリーもなついてはくれているが。

いま、気になる娘ができたばかりのこの時期に、あまり会いたい相手ではない。

というよりも、それほど仲がいいわけでもないのに、一体何の用事で来たのだろうか。

そう言えば、筆頭巫女つてのは、王女だったよなあ。

ほんのわずかに残る、血の香り。
マリーの周りは、やはり不穏だ。

この前、賢王と名高かった先王が身罷つて、王座をかすめるように奪ったのは、確か先王の弟だったと思う。

「欠片が降る、か。巫女が予知して、王族がそれを知る——」

欠片、とは。ケイオスの欠片のことだ。
はるかいにしえに碎かれた、死すべき宿命を秘めた、神の子の欠片。

ジンの身体に宿る欠片と、おなじもの。

なぜ、ケイオスが砕かれたのかなどということは知らない。
その欠片が、散らばって。

時を越えて降ってくる、そのわけもしらない。

けれど、ケイオスの欠片は。

多大な力を秘めていて、人間に余りある恩寵と凶兆をもたらす。

「まったく、厄介な」

王の係累であるマリーが、この時期に。

欠片が降るとケイオスが告げたこのときに。
やってくるのも、無関係とは思えない。

「ふたりは、一緒にいるのか……？」

ふらりと通りに出て、空気のおいをかぐ。

そのままたどっていけば、キアラのおいもマリーのおいも、
同じ方角からやってくる。

もつとも、考えてみればそれも道理だ。

武術に長けた大地の民——頼みの綱である自分が寝こけていて、
その隣に少し頼りなさそうだが大地の民がいたとしたら。少しくら
いの頼りなさは、大地の民という名前がカバーしてくれる。ちよっ
とくらい頼りなくても、大地の民なら、強いに違いないと思い込み。
傭兵になってくれるよう、頼むくらいはするだろう。

聡いマリーなら、なおのこと。

結局、おいを追う途中。

マリーが無事に追っ手をまいて、隠れたところも確認したし。相手を殺したくないという甘さで、自ら窮地におちいていたキアラもきちんと助けて回収できた。

助けての大地の民としての意味を、まるでわかっていなかったよなキアラに、少しはこちらを意識するように仕向けることも、出来たと思う。

今のところは万事うまくいっているが、問題はこれからだ。

うるんな眼差しを向けた後、さきにぼてぼてと歩き出したキアラの、ゆらゆら揺れる金茶の尻尾の先をみつめながら、ジインは深く息を吐き出した。

マリーを、キアラの言う場所で回収するのはまだいい。だが、マリーを助けて、そのあとはどうするのだ。

自分もキアラも、一介の大地の民で、なんの権力も持っていない。い。

少しくらい武術に長けていたって、それが何だというのだ。数を頼みに出来る、権力という暴力の前では、なんの力にもなりはしない。

ふってくるであろう欠片にしても、どうしていいものが皆目見当がつかない。

それよりも前に、ところかまわず暴力的な眠気に教われる自分に、キアラとマーリを護りきれるとは到底思えないということもあった。

おれ、弱音しか吐いてないな……

苦い自己嫌悪をかみ締めながらも、今ジンにできることは、とりあえずこみ上げてくる眠気を封じるべく、マーリを拾うまでに少しでも休んでおくことだけだ。

まるで軽蔑するようなキアラの眼差しに耐えながら。ジンは宿屋にはいり、とりあえず部屋を取ったのだった。

とおとふたつめ。Side:ジン（後書き）

長かったです、ジンサイド終了となります。
もうひとつかふたつ、この章がつづいてから、新章となります。

とおとみつつめ。

神様の、かけら……か。

あまりにも現実的ではなくて、思わず胡乱なまなざしを向けてしまったが。

宿の部屋に入るなり、寝台に倒れこんで、すうすうと眠ってしまったジインを見ると、それも真実かもしれないと、少しばかり思ってしまった。

神様の欠片を拾ってしまった少年の、物語を知っている。

死のうとしていた少年が、空から降ってきた欠片に当たってしまったという話だ。

どうせ要らない身体なら、自分によこせという神様に。

少年はその身を差し出すのだ。

少年は、神様の力を借りて、乱れた国を治め、最後には王様になったと思う。

物語はそこで終わっているから、少年のその後のことは知らないけれど、物語であるくらいなのだから、神様の欠片という話は、もしかしたら本当なのかもしれない。

キアラはひとつ、溜息をつく。

寝台で寝息を立てるジインのきれいな顔を覗き込んだ。

どうせ泊まるわけではないから、一部屋でかまわないといったけれど。

同じ部屋で、ほとんど知らない人物が寝ているというのは、やはり少しばかり違和感があると思う。

まあ、同じ大地の民だからいいけど。

眠るジインの頬をつんつんとつつき、キアラはあまり上等ではないソファに身体を沈みこませた。

細かい傷がたくさん入ったガラスがはめ込まれた、宿の窓。

そこからは、天高くそびえたつ、という形容がぴったりの、白いお城がよく見えた。

「おうじさま……」

ぽつりと呟いて。

手のひらをぎゅっと握り締める。

そんなに遠い場所とも思えないのに、どうしてもに行けないのだろう。

「ごめんね、力になりに行くなって、約束したのに」

この数年間、幾度も思い返した彼の顔を、もう一度脳裏に描いてみる。

ほんの少し病的な、白い肌。

月の光のような、細い金色の髪。青い青い、空のように青い瞳。

寂しげに、わらう人だった。

ニンゲンは怖いのだと教えられていたけれど、彼はとても優しくて。寂しそうで。せつなそうで。

一度でいいから、心から笑って欲しいと会うたびに思っていた。

彼が、なんのために。大地の民のすまう森にやってきていたのかは知らない。

大地の民の力を借りにきたのかとも思ったけれど、誰一人として、

彼についていった者はいなかった。

——私が、私が一緒に行く！

哀しくて、切なくて。

そう叫んだあの日を、覚えている。

——私が、おうじさまと一緒にいくから！

あんなに寂しそうに笑う人を、一人にはしておけないと思った。けれど、キアラはまだ成人にはなっていないくて。

成人していなくて、森から出ることは許されていなくて。結局一緒に行くことは、できなかった。

——キアラが、私の味方でいてくれるのだと思うだけで、心強く在れるよ。

——行くから！ 大人になったら、きっと会いにいくから！ 力に、なれるように……

人間にとつての約束は、大地の民の約束ほどは重くないと、あにさまもあねさまも言っていた。

けれど。

おうじさまはきっと、約束を覚えていてくれると思うのだ。覚えていてくれると、信じているのだ。

何年たっても、きっと。

待っていてくれるのだと、信じている。

「ごめんね、おうじさま。絶対いくから、もうちょっと、もうちょっとだけ、待ってて？」

すぐに行くつもりだったけれど、マリーと出会ってしまったから。おうじさまとおなじ、金色の髪の毛と、青い瞳の女の子みたいな男の子。

あんなに困っている子をほっていくことなんて、できない。だから。

もうすこしだけ、まってほしい。

おうじさまには、一番大切なひとは味方になってくれなかったかもしれないけれど。

他の味方はいるでしょう？

でも、あの子は今、ひとりぼっちだから。

目に映る全員を助けられるほど、強くないのはわかってるけど。それでも、力が貸せるのなら、役に立ってあげたいと思うから。

お城から視線をそらして、キアラはソファの上で膝を抱え込んだ。眠るつもりはないけれど、このあとどれだけ動かなくてはいけなかわからないのだから、少しくらいは休んでおかなくてはならない。

まぶたのうらで。寂しそうに笑っているおうじさまに、まってて話しかけて。

キアラは深く息を吸い込んだ。

とおとみつつめ。（後書き）

回想編をちよつとはしょってしまったので。
次話は新章にいきますー

ひとつめ。

幾度も目を閉じたけれど、眠ることも出来なくて。

ジンが目覚めるまで、じつと窓から外を見ていた。

お城の真白い壁が、やがて夕暮れどきの金色がかったオレンジ色に染まり。やがて名残を惜しみながら西の山の向こうに太陽が沈んでいくと、青みがかった夜の影にそめられた。

もう少ししたら、完全に夜の中に沈むのだろうと思う。

窓にはそれぞれ橙色の明かりが揺れていて、時折人影が通るのが見えたけれど。

あまりに遠すぎて、おうじさまがいるかどうかはわからなかった。

「おはよ」

視界の端で、ジンが身じろぐのが見えて、キアラは視線を窓からジンのほうへと向けた。

薄っぺらな一枚の毛布を抱きかかえるように丸まって寝ていたジンは、鼻の頭に皺を寄せるようにして眠たげに辺りを見回すと、キアラを認めて数回瞬きを繰り返した。

「ああ、おはよう」

夜だけだな、という突っ込みもすることはない。

ジンはひとつ大きなあくびをしたあと、思い切り伸びをした。

「そろそろ時間か？」

「うん、そろそろいいと思う」

キアラが言えば、ジインはひとつ、うなずいた。

「ジインってなにをしている人なの？」

鏡の前で、ジインが洗面器に水差しの水を注いでいる。眠気覚ましに顔でも洗うつもりなのだろうか。

キアラが問えば、ジインはなぜか一瞬手を止めた。

そしてそのまま、無言のまま顔をざばと洗い出す。手近にあったタオルで丁寧に顔の水気をぬぐってから、ジインは初めてキラのほうをまっすぐにみつめた。

「神話研究、とでもいえばいいか？」

「え？」

「神代の研究をしている。神話に語られるどこまでが真実で、どこまでが支配者が作った話なのかということ、膨大な資料を照らし合わせて読み解いている。時折、医者 of 真似事もする」

手櫛で髪の毛をざざっとまとめ、ジインはどこか自嘲気味に笑った。

「いつでもどこでも寝てしまうから、傭兵家業には向かなくてな。神殿横の資料館の研究者という肩書きだけど、まあ半分くらいは寝てる気がするな」

「調べたら何か、いいことがあるの？」

ジインの職業を馬鹿にするわけではないが、そんなことをして一体何の意味があるのだというのが正直な感想だ。

「いいことは、あるかもしれないし、ないかもしれない。なににせよ、歴史は繰り返すものだから、自分たちが歩いてきた道筋を明確にしておくのは、多少いいこともあるんだろうよ。それに、まあ。この身体に宿る神の欠片がなんのためにあるのかも、少しくらいはわかるかもしれないしな」

ふうん？とキアラは腑に落ちないような表情でうなずいた。当人にしかわからないことというのは、けっこういろいろあるものだ。

「マリーとも資料館で知り合った。マリーの姉さんが神殿の巫女だな。おれの友人なんだ」

一通りの説明を終えたあと、ジインは少し首を傾げてこちらをみやった。

「おれもひとつ、キアラに聞きたいことがあるんだ。キアラはなにをしに王都にきたんだ？」

それはまあ、一緒に行動するならば。押さえておきたい質問のひとつだと思う。

けれどいま、キアラにとってはあまりされたくない質問ではあった。

——おうじさま。

なんと説明すれば、わかりやすく突っ込まれないだろう？
心の中で言葉を吟味しながら、キアラは眉をぎゅっと寄せて深く考え込んだ。

ふたつめ。

口を開け、言葉を搜して、また閉じた。

キアラが言いよどんでいる間にも、ジインは手早く身支度を整えていく。

「……何年か前に、森に来た人に、会いに来たの」

その様子をみつめながら、ようやくとそれだけを告げると。

ジインはただ「そうか」と肯いた。

部屋をぐるりと見回して、何も忘れていないことを確認してから宿を出る。

「会えるといいな」

通りに出てから、ぽつりとジインがそんなことをいった。

ジインも、ニンゲンはすぐに約束を忘れてしまうと思っているクチなのだろうか？

「会えるよ。約束を忘れるような人じゃないもの」

口を尖らせて反駁はんぱくすると、ジインは静かにくちびるを笑みの形にひいた。

「忘れなくても、時間は流れる」

意味がわからない。

けれど、ジインのその表情はあまりにも静かで。諦観という言葉がぴったりとくるような顔つきで。おうじさまはそんな人じゃないのだとさらに言い募りたかったけれども、なんとなく氣勢をそがれてしまった。

そのあとは互いに無言のまま歩く。

途中露店で、ジインはまたローブを買い、キアラには大きめの帽

子を買ってくれたが、基本的に会話は無い。そのわずかな会話でジンがぼつりと話したことによれば、王都では大地の民は珍しいから、目立たないようにするためにかはぶっているほうがいいということらしい。

先ほどの傭兵たちと会うかもしれないと。

警戒しつつ、道に行く。

けれど、マリーとの待ち合わせ場所までは、拍子抜けするほどあつけなく。何事もなくついた。

大きい方の門では、いかめしい顔つきの衛兵たちが、町に入るニンゲンや亜人種たちを厳しくチェックしている。特になにを見ているのかは知らないが、とりあえず通行料を納めて、ついでに犯罪者手配書に載っていないければ、誰でも王都に入れるのだから、容易いものだ。

逆に出るときはもつと簡単で。

一応手配書はチェックするようだったが、実際のところほとんどチェックなんてしてないんじゃないかなろうかというのが見ていての正直な感想である。

「ニンゲンがたくさんいる……」

エルフや獣人といった亜人種も時折見かけたが、通るのは人間が大半だ。

王都の門は、わかつてはいたことだが、とりあえず人間で溢れている。

今日、初めて町に入っただけのときも思ったことだが、とりあえず人間が多すぎだ。

「そりゃ、人間の町だからな」

詳しく聞いたわけではないが、王都でくらして長そうなジインは苦笑まじりにそう言って笑った。

「マールは無事かな」

「どうだろうな」

匂いをたどるからとはいったものの、これだけ人間が多いとさすがに匂いが混じって追いにくい。

門の付近は、王都に入る人と、王都から出る人でごった返している。表通りも人が多いと思ったが、その比ではない。

キアラが町に入ったときは、馬車に揺られていたし、なにより小さい方の門から入ったから。人が多いと思ってても、ここまでじゃなかった。

「マール……」

においなんてそう簡単に消えるものじゃないし。

追跡だつてそう難しくないと思ったのに、この人間の多さが邪魔をする。

あせつて周りを見回せば、ジインがぽんと軽く背中に触れてきた。

「落ち着け。大丈夫だから。ちゃんとみつかる。ここあたりにいたのは間違いなさそうだ」

そうジインがいつて示した先には、少し太めの樹があつて。

キアラが寝こけているジインから奪った、例のフードつきのローブが、なぜか下のほうの枝に大雑把に結ばれていた。

風に飛ばされて、ひっかかったとか、そういうのではなく、きちんと何らかの意志を持って、そこに留め置かれたローブ。

近づけば、マーリのおいがかすかにした。

「どういうことだろう?」

「さあな」

もし、追手に見つかって逃げるなら。あるいは、近くまで追手が来たから隠れていた場所を移すなら。こんなふうにロープを結び付けたりはしないだろう。

悪目立ちをするもとだ。

キアラは小走りに駆け寄って、ロープを手取る。

ロープは思ったよりも固くしつかりと結ばれていて、苦勞して解けば、結び目からはらりと何かが落ちた。

白いハンカチに、殴り書くような文字のあと。

『太陽と月が眠る場所』

意味を図りかねて、ジインを振り返れば。

思ったよりも近くにいたジインは、ひどく渋い顔つきをしていた。

みつつめ。

「ジン、心当たりがあるの？」

太陽と、月が眠る場所。

殴り書きの文字があるハンカチを、やってきたジンがそつとキアラの手から取り上げる。

「ある、というか……」

言いよどむジンの表情は相変わらず複雑で。
見守るキアラの前で、ただ深く息をついた。

「とりあえず、マールはこの付近にはいないんだろう。においもしないしな」

それはまあ、確かにそう思う。

すっかりあたりは暗くなって、空には星が瞬いていたし、先ほどまで静かだった通りの酒場からはオレンジ色の柔らかな光が漏れて、にぎやかな喧騒がこちらまで響いてくる。

門を出て行く人間も、入ってくる人間も、あいも変わらず多かったが、それももうほんのわずかのことだろう。あと一刻もすれば、門は閉じられて、明日の朝まで開くことはない。

よほどの緊急事態でもない限りは。

「とりあえず、飯でも食うかな」

溜息交じりのジンのひとりごとに、キアラは思わず眉を寄せた。

キアラも確かにおなががすいていたが、今はそれどころじゃないだろう。

待ち合わせ場所に、マリーはおらず。

かわりに残されていたのは、意味のわからないメッセージ。

「マリーは？」

つい、とがった声を上げてしまったのもいたし方のないことだとおもう。

「思っていたよりも、事態がややこしそうだし。いったん状況整理をしたいんだけどな」

キアラのとがった声を咎めるでもなく、のんびりとジインはそう言っ

きよるきよると辺りを見回すと、先にたって歩き出した。

「状況整理？」

「そう。ちよつとめんどくさそうな感じだからなあ……少し情報収集もしたいし」

小走りに、キアラはジインのあとを追いかける。

ジインは、特に入りたい店があるふうでもなく。

ゆったりとした大股で、人ごみを器用にすり抜けて歩きながら、通りの酒場を覗いていく。

キアラは、無言のままジインの後に続くことにした。

話の途中で寝てしまうジインはどうかと思うが、たぶんきっと、自分よりもこういう事態を幾度か経験しているのだと信じたい。

それならばきっと、任せてしまったほうがいいに決まっている。

「おや、眠り男」

見知らぬ男からそんなふう

に声をかけられたのは、通りを歩きな

がら、10軒ばかり酒場を通り過ぎたあたりだった。

「かわいい女の子連れじゃないか、めずらしいね」

くつくつと楽しげに笑う男は、なぜだかとても目が細かった。
薄く大きな口も、なんだか全体的にのっぺりとした顔の印象だ。

「お前を探していたんだよ」

「わたしを？ 光栄だね。高名なる眠り男殿が、わたしに何の用だろっ」

細い目の奥で、瞳が油断のない冷たい光を放っている。
キアラはぞくつとしてとっさにジインの影に隠れたが、どうやら知り合いらしいジインは別段気にもしない様子だ。

「最近、神殿の様子はどうか？」

「神殿？」

「神子の神殿だよ」

細い目の男の目が、さらに細くなる。

そんな男を近く of 酒場の方へと誘導しながら、ジインがちらりとあたりの様子を窺ったのがわかった。

「神子の神殿か。ちょっとキナ臭いところだね」

細めの男がくすくすと楽しげに笑う。

不穏な空気の似合う男だと、その後を追いながら、キアラはそんなことを思った。

よつつめ。

酒場は喧騒で包まれていた。

端っこの少し奥まったところに陣取ったジンと細目の男は慣れた様子で麦酒と軽食を注文する。

キアラがどうするべきかと惑っていると、無言でジンが隣の椅子を引いた。

一拍の間を置いて、おそらくキアラのために、よく冷えた果実水も頼んでくれる。

「そういえば、そちらのお嬢さんはどなただろう？」

ジンのその様子に、細目の男は興味を抱いたらしい。色素の薄い灰色の瞳が、じっとこちらをみつめてくる。

「手を出すなよ？ 名はキアラ。森から出てきたばかりなんだ」

「ほう？ 君の婚約者とか？」

「そついうわけじゃないが」

ジンは曖昧に言葉を濁すと、わずかに肩をすくめた。

大地の民の、あと妹の関係を、人間に説明するのは面倒くさいということだろうか。

けれど、細目の男はそんなジンの様子にさらに興味をもったらしく、つと細い指先を伸ばしてキアラの手に触れてきた。

おい、とジンが眉を寄せて男をにらむが、どこ吹く風といった様子だ。

「わたしはカツツエ。ジンとは腐れ縁とでも言つべき間柄だね。よくつるんでいるんだよ。以後お見知りおきを」

くすくすとカツツエは笑みを浮かべ続けているが、その瞳はやはり笑っていないように見える。

ひんやりと冷たい指先が、どうにも落ち着かない。

全体的にあたたかな印象のあるジンとはあまりにも対照的だ。

思わず助けを求めるように、ジンを見れば。

ジンは無言のまま手を伸ばし、器用にカツツエの手だけをテーブルの上から払いのけた。

「妬いているのかい？」

「なんでもいいが、大地の民の娘に気安く触れるな」

「ほう、それはどうして？」

「大地の民は嫉妬深い男が多いのさ。ヘタに触って殺されてもおれは知らないよ」

ジンの言葉が面白かったのだろうか。

カツツエはくくつと肩を震わせて、麦酒のはいった木のコップを仰いだ。

「嫉妬深いって、それは君のことだろう」

ジンは答えなかった。

カツツエはこちらにも視線を向けてきたが、そもそもニンゲンのことをよく知らないキアラに答えられるはずがないのだ。

「まあいいさ。それで、眠り男。君はわたしになにを聞きたいんだい」

どうやらカツツエは追及を諦めたらしい。

恰幅のいい中年のおばさんが運んできた、鳥の照り焼きをフォークだけで器用につつきながら、ようやっと本題を切り出した。

「神子の神殿のことだ」

「ああ、キナ臭い件かい？　そう面白い話でもないよ」

ジインは麦酒のつまみに、チーズを衣を着けて揚げたもの。

話のついでに、こちらの口に放り込んでくれたが、とろりと蕩けてとてもとてもおいしかった。

うっとりしていると、苦笑して皿ごとこちらによこしてくれる。どうやら全部くれるらしい。

「そもそも、砂禍サカが起きると予言があったという話だ」

砂禍とはなんだろうと、キアラもちらりと思ったのだが、とりあえず二人の会話に割り込む隙はなさそう。チーズを平らげること
に専念することにした。

熱いうちに食べなければ、せつかく蕩けたチーズが固まってしま
う。

そうすればきつと、おいしさも半減するに違いない。

「砂禍、か……」

「おや、眠り男は博識だねえ。こんな物騒な単語、なかなか一般人
には浸透していないと思ったけれど」

それなら、なぜカツツエは知っているのだろっ、とも思うが。

この得体の知れなさなら、もしかしたらなんでもありなのかもしれ
ないと思う。

「砂禍——砕けた『忘らるる神の欠片』……」

「死すべき宿命の神子の、その欠片。滅びの砂を、広げるモノ」

呟くジンに、カツツエが言葉を添える。

忘れられた神、というのは、死すべき宿命の神子ケイオスの別名だ。

誰もが知っている神様なのに、忘れられたという通り名も変だとは思うが、なんでも、ケイオスについての神話がほとんど散逸してしまって残っていないから、ということらしい。

よっつめ。(後書き)

タイトルをちょこつと変えてみました。

いつつめ。Side:マーリ

どうしよう、と思った。

厳選したはずの『会』のメンバーに裏切り者がいるなんて。

いざという時の逃げ道である、姉のいる神殿までも手を回されて、芝居でもなんでもなく、本当にどうしようと思ったんだ。

そんなときに、ふとひらめいたのが。

資料館にいつもいる、灰色髪の大地の民の男のことだった。

なにをしているのか、わからない男。

姉の友人で、かわりもの。

けれど、大地の民だ。

戦闘に長けた民。

ならば、あるいは。もしかして。助かるかもしれない。

本当かどうかは知らないが、神の欠片を宿しているとか自称しているその男は、とりあえずいいやつだった。

自分の外見に惑わされて、いるのかどうかはわからないけれど。

いつもよく構ってくれるし、ごろつきから護ってもらったこともある。

唐突に眠ってしまうのが玉に瑕だけれど。

見つければ、きっと。なんとかしてくれるかもしれない。

結構不純な動機から、ジインを探して。

でも、寝ていて。

寝こけていたジインの代わりに、大地の民の娘を雇うことにして意外と使えた『ジインの代わり』に逃がされて門のところまで逃げてきたのは夕方こと。

約束の時間まではまだ少し猶予があるとはいえ。

いつ見つかるかわからないこの状況——ついでにいうなら、護衛すらもないこの状況で、のんびり夕食をとる気にもなれはしない。

くうくうと空腹を訴える胃をなだめながら、門に程近い木の上から様子をみていた、その時だった。

「……姉さま？」

思わずこぼれた、自分の声にどきりとする。

大きな門を出て行こうとする、簡素な駕籠^{カゴ}。その、小さな窓からちらりとみえた、目隠しをされた女の横顔。

ほんの一瞬しか見えなかったけれど、あれはまさしく。

「……どうすれば」

たったひとりの、姉。

神子の神殿の筆頭巫女——神殿で、神官長と同位の彼女が、何故今。この時期に、駕籠に乘せられて王都から出て行くのか。

尋常ではない。

ましてや、数日前に、姉が予知^みた、砂禍の飛来。

伝説の中に語られる忘れられた神——死すべき宿命の神子の欠片が、禍をまとって降ってくるという。

そんな伝説級のトラブルがやってこようとしているこの時期に、筆頭巫女が目隠しをされて出て行く理由がわからない。

むつつめ。Side：マーリ

ここに隠れていれば、安全だ。

少し頭が足りなさそうな大地の民の娘がきつとみつけてくれるだろうし、ジンだっておつつけやってきてくれるはず。あのお人よ
しな大地の民は、ぼくのような弱い子供が困っているところを見捨てることなどできるはずもないのだ。

「ねえさま……」

でも。

だけど。

このままここに隠れていたら、姉はどうなるというのか。
自分の安全は護られても。

いつも、自分を護るために矢面になってくれる、姉は。

くそ、と低く毒づいて、音を殺して木から飛び降りた。
いつもなら姉が苦い顔でたしなめてくる行為だったが、今は咎めるひとも誰もいない。

降りた瞬間、やはり足元に積もった木の葉ががさりと音を立てたが、幸いにも雑踏にまぎれて誰も気づきはしなかったようだ。

「……どうしよかな」

このまま、姉を追うのはいい。

けれど、追ってくるはずのふたりに、何かしるしを残しておかなければ。今度は自分が助けてもらえない。

自慢ではないが、身体を動かすのは苦手だ。

頭脳戦なら得意だが、脳みそまで筋肉で出来ていそうな傭兵どもに勝てる気などはさらさらしない。

そういう実戦系は、実戦系が得意な奴らに押し付けてしまえばいいのだ。

ふと思いついて、これまで羽織っていたジインのローブを脱ぎさる。

懷から取り出したハンカチに、殴り書くようにしてメッセージを刻んだ。

『太陽と月が眠る場所』

創世の神の涙から生まれた、死すべき宿命の神子ケイオス。
その誕生と宿命を喜び嘆いたことから生まれた、光と闇の、二柱の女神。

太陽も月も、その女神たちの眷属だ。

死すべき宿命の兄をまもるべく、定めづけられた女神たちの眷属は、昼も夜もケイオスを見守り続ける。

だが。

太陽も月も。昇らぬときがある。

太陽と、月が眠るとき。

それは、ケイオスが違う存在に護られている時。

護るのは、ひと。そういうことになっている。

護るのは。ひとのみこ——今現在は、筆頭巫女の、姉のことを指す。

頭の弱そうな娘には通じないかもしれないが、ジインにはきつと通じるはず。

不安を無理やりに押し込めて、殴り書きのあるハンカチを枝にそわせて、ジインのローブを乱暴に結び付けた。

「はやくきてよ、ジイン。お願いだから」

いつも、周りに誰かいた。

困ったことは、うまく動かしたおとなたちがいつも片をつけてくれていた。

自分はそうなるように謀るだけ。

こんな一人ぼっちは初めてだ。

動かせる大人たちが、こんなに少ないことも。

姉が乗せられた駕籠はいつのまにか門の前から消えていた。

門を出る人間と入る人間で溢れていたから、もう少し時間がかかるかと思っただけ。

さすがに、あんなに怪しい駕籠を門から出そうとするだけのことはある。なんらかの権力——それも、門番を黙らせてしまうだけの力を持った誰かがバックについているらしい。

こっちの方面の門から出た先に、領地を持っているのは誰だったか。

脳裏に地図を描きながら、こっそり門を出た。

身分を明かせば止めるものはいないだろうとは思っただけ。それだと痕跡が残ってしまう。

痕跡は出来るだけ残さないのが懸命だ。

まあ、追ってくると思っている、あのお人よしの大地の民は少しばかり苦勞するかもしれないけれど。

ななつめ。

砂禍^{サカ}か、と言ったきり、ジインはむつつりと黙り込んでしまった。そんなジインには構わず、カツツエはひとりで麦酒をあおり、パイ生地^{パイ生地}に卵と野菜を詰めて焼いたものを器用にフォークとナイフで切り分けてせつせと口に運んでいく。

「キアラさんも食べたらいいよ？」

ふと、気づいたように、カツツエは一きれ分けて小皿に乗せてくれた。

「ありがとうございます」

お礼をいってフォークを手を取ったものの。

黙りこんでしまったジインのことが気になって、食べる手はあまり進まない。

「カツツエ」

「うん、なんだろう」

「これを見て欲しい」

ジインがそう言って差し出したのは、マージが残していったハンカチだった。

「ふむ、随分と高価そうなハンカチだね」

書かれた文字に対してではなく、カツツエはとりあえずハンカチそのものについて、そんな感想を述べた。

「まあ、いいとこの坊ちゃんみたいだからな。それよりも、これだ」
「太陽と月が眠る場所、か」

「砂禍の件と関係が有ると思うか？」

「あるんじゃないのかな」

上品な仕草で口許をぬぐい、カツツエはハンカチを手を取った。

「太陽と月が眠るのは、ケイオスが護られている時だけという神話があったね。建国の神話のあたりだったから、どこまで本当かは知らないが、護るのはミコじゃなかったかな」

カツツエの言葉に、ジインはそうだとただうなづく。

「ケイオスの眠りをやさしく抱くかわりに、ミコは国の繁栄を望んだそうだ。ケイオスはミコのもとで眠り、太陽と月も、ケイオスを見守りながら休息をとる——その言葉が示している場所は、神子の神殿だと思うのだが」

ジインがそう言えば、カツツエはつまらなさそうに麦酒のカップを指先で弾いた。

「まあ、間違いなくそうだろうね」

「神子の神殿で何かあったんだろうか」

「あつたんじゃないでしょうかねえ」

くすくすと笑って、カツツエは細い目をさらにつつすらと細めた。軽く、指先を鳴らす。

ほんの一瞬、影が酒場を走り抜けたような気がするのは気のせいだったのだろうか？

「まあ、眠り男と遊ぶのは面白いから、今回のお代はおまけにしておいてあげるよ」

楽しげにそう言って、カツツエはもう一口、麦酒を口に含んだ。

ななつめ。（後書き）

私が書く話ではなぜか常にヒロインが活躍しないようです。
なんでだろう……？

今回、分量少な目です。

長らく説明が続いてきましたが、そろそろようやく話が動きます（
予定）

やつつめ。

いったいなにがどうなっているのやら。

ジンとカツツエは難しい話を続けていて。

軽食を平らげたあと、暇そうにしていると、ジンが気を利かせてくれて頼んでくれた甘くてふわふわしたかわいらしいお菓子。ケーキとかいうらしいふわふわとした生地、生クリームとかいう白くてやわらかくて甘いものをたっぷりつけて食べると、この上なく幸せな気分になった。

それはまあいい。

問題はいつのまにやら意識が飛んで、眠ってしてしまったことと。カツツエとジンの姿が消えていることだ。

「えつと……」

きよろきよろと辺りを見回す。

というか、ここはどこ？

そこは小奇麗な小さな部屋で、本棚と小さな机とソファだけがおいであつた。

ジンとカツツエの姿はなく、ソファで寝こけていたキアラには、上質の毛布がかけてある。軽くてふわふわとやわらかくて、このまま毛布を抱きしめてもう一眠りしたくなるような気持ちのよさだ。

毛布の誘惑に頑張つて打ち勝ち、キアラはそつとソファから滑りおりた。

そつと毛布をソファの上に戻し、もう一度あたりをきよろきよろ

と見回してみる。

小さな窓がはまっていて、そこからは、真っ白なお城を望むことが出来た。

「あれ？」

そこで気がついて、キアラは首を傾げる。

自分は一体どのくらいの間眠っていたのだろうか。

酒場に入った時は、確か夕暮れ直後だったと思うのだが、今空は青く澄んでいる。

まだ低い位置に太陽は輝いていて、とても不思議な心持がした。

「ジンもカツツエさんもどこにいったんだろう……？」

わずかに室内に残っている匂いから、自分をここに運んだのは、ジンとカツツエで間違いなさそうだが、肝心の本人たちの気配が微塵もない。

とりあえず状況把握を優先すべく。

壁にそつとたてかけてあった大剣を背中に背負い。

ドアノブに手をかけて、キアラは思わず眉根を寄せた。

ノブは、回る。

でも、開かない。

内側に、鍵はない。

つまり。外から鍵がかけられていると、そういうことだろうか？

一体どういうことだろう。

わずかに唇を尖らせて、キアラは状況を分析しようと試みた。
寝ていた自分、消えた二人の姿。かかっている鍵。

閉じ込められた？

同族の兄相手に、それはないと思うのだが、なんにせよ、ここは
キアラが知っている常識の通用しない王都である。

「……とりあえず、マ―リを探さない」と

一人ごちてキアラは一度背負った大剣をはずし、両手で体の前へ
と構えなおした。

このつめ。

大剣を前に構えて、とりあえず深呼吸をする。

扉を壊すのは、そう難しくはない。

ただ。大きな音はするだろう。

もし、ジンたちに何らかの意図があって閉じ込められているのなら、そんなに大きな音がするのは歓迎できない。脱出しようとしているのがバレバレだ。

というよりも。なんで自分は閉じ込められているのだろう？

自分を閉じ込めたところで、何のメリットも見出せないと思うのだけれども。

だとすれば、何か理由があるのだろうか？

ここにいてくれという、ジンたちの意思表示なのか？

剣を構えたまま、キアラは悩んだ。

けれど、とキアラは思う。

閉じ込めたのが、ジンだとしても。ジンだって、大地の民なのだ。

自由と力を愛する大地の民を、閉じ込めることの意味をわかっていないとは思えない。

軽く息を吸って、大剣を振り上げる。

仮に大きな音がしたとしても、人が集まってくる前に逃げ出せばいいだけの話だ。

そのまま振り下ろそうとして、キアラはふと動きを止めた。

マールは、どうやって探せばいいのだろうか？

探さなければとは思っていたけれど、いまさらそのことに思い至った。

ぐるぐると思考がムダに回る。

まわりすぎて、空回りしている気がしないでもない。

マリーがどこに行ったかということは、ジンとカツツエなら見当がつくかもしれないけれど、王都に着たばかりの自分が推測しようというのはいささか無理があるような気がしてきたのだ。

この部屋には、二人のにおいしか残っていないし、それならばやはりここで待っていたほうがいいのだろうか？

「うー……」

自分の迷走する思考を扱いかねて、キアラは剣を下ろして低く唸った。

最善策がまるで浮かばないのは何故だろう？

ソファに剣を立てかけて、キアラはそつと窓際の方へと進む。

おうじさまがいるであろう、お城でもみつめれば、少しは心が落ち着くかと思っただが。

「え？」

ふと、窓の外を見下ろして、キアラは目をしばたかせた。

今更ながら気づいたが、ここはどうやら一階ではなかったらしい。眼下を、ひよろんとした体型の男が長い手足をもてあますようにして走っているのが見える。のっぺりとした顔立ちの、細い目の男——カツツエだ。

「なに、してるんだろう……？」

わずかに目を細めて通りを窺っては見るものの、近くにジインの姿はないようだ。

カツツエの後ろを小走りに駆けてくる、傭兵らしき男が、ひとり、ふたり、さんにん。

そうはやく走っている様子ではないが、もうすぐカツツエに追いつきそうな速さではある。

「逃げてる、のかな……？」

時折後ろを窺う様子のカツツエを見ていれば、その表現がしつくりと来るようだった。

あまり運動は得意ではないのか、カツツエの駆け方は本当に不恰好だった。

「えっと……」

とりあえず、助けるべきなのだろうか？

自分を閉じ込めた疑惑のある男ではあるが、マールへと続く道筋の鍵を握っている男でもある。

ちよつと考えてはみたものの、もとよりキアラはあれこれと考えるのが得意な方ではない。ソファに立てかけてあった大剣をつかむなり、嵌めこみの窓を剣でなぎ払うようにして突き破った。

がしゃん！とひどく派手な音がする。

こちらに向かって走ってきていたカツツエはもとより、後を追ってきていた傭兵たちも驚いたようにこちらに視線をよこしてきた。そんな彼らを一瞥して、キアラは窓から飛び降りた。

いくら太陽が真上に近い——つまりは昼時だといっても、裏通りらしいこのあたりに、他に人影はほとんど、ない。

「おや、お嬢さん。起きたんだね」

森を駆け回っていたキアラにとっては、ニンゲンが作った建物の2階3階くらいの高さは、たいした問題ではない。大剣を負ったまま地面にとんでも、バランスを崩したりと無様なことにはならなかった。

ほんのわずかに息を切らせて、カツツエがそう声をかけてくる。

「おはようございます、カツツエさん」

「おはよう」

細い目をさらに細くして挨拶を返したカツツエは、そそくさとキアラの後ろに回りこんできた。

「いやあ、助かったよ。ちょっと神殿にもぐりこんでいたら、見つかっちゃってねえ」

どうやら、キアラに撃退してくれと言いたいらしい。

まったく困っていない様子で、助かったといわれても、むしろこちらが困るばかりなのだが。

111のつめ。(後書き)

更新あいてしまつてすみません><

とお。

「あの。カツツエさん、なんで私の後ろに回りこむんですか？」

護れということだろうと思いつつ、キアラは一応突っ込んでみる。男も女も等しく戦う大地の民とはいえ、依頼人でもないのに男を護るのはいささか抵抗がある。

「私は頭脳派でねえ。あんまり肉体労働的なことは得意じゃないんだよ」

けれど、カツツエは悪びれる様子さえなく。肩をすくめてうつすらと笑って見せた。

「昔っからよく言うだろう、適材適所。君の分まで頭は動かしてあげるから、君は私の分までしっかりと戦ってくれよ」

まったくなんていい草だ。

けれど、確かにカツツエは弱そうだ。

体つきもひよろんとしているし、筋肉なんてどこについているの？といった風情である。背は高かったが、長い手足をもてあましているようで、走ったり歩いたりしているのさえ、どこか不恰好なのである。

「貸しに、しておきます」

けれど、何かが腑に落ちない。唇を尖らせてそう宣告すると、キアラは改めて傭兵たちに向き直った。

よく見れば、傭兵たちのうちの一人に見覚えがある。

昨日、マリーをかばって対峙したうちのひとり——うるさいだけの髭面と違って、冷静に応戦してきた男だった。

背中から剣を下ろし、ゆるく構える。

腰を落とし、足を軽く開いて、意識を澄ます。

柔らかい布で作った靴の下で、石畳と砂がこすれて音を立てた。空気が、ぴんと張り詰める。

動くのは、誰——？

「やめなさい」

ぴん、と張り詰めた糸を切ったのは、カツツエでもなければ傭兵たちでもなく。ましてやキアラ自身でさえもなかった。

「ロータスさま」

昨日も会った傭兵が、わずかに眉を寄せて咎めるような声を上げる。

凝った刺繍がどこされた布を目深に被った人物が、もうひとつむこうの角のところに佇んでいるのが、キアラの位置からも見えた。

どこかで、聴いた声だと思う。

「そこな男はともかく、大地の民に一体何の関係が有ろうか。剣を引きなさい」

「しかし、ロータスさま。この娘はマール殿下を……」

「私の言葉が、聞こえなかったか。イシエ」

やわらかくまるやかな声音が、けれど毅然とした意志を持って響く。

傭兵は悔しそうな顔つきで剣先を下ろした。

「すまなかったね、大地の民よ。内輪の争いに巻き込んでしまったようだ」

布を目深に被った、男の声がそう静かにわびる。

キアラはただ黙って男の姿をみつめていた。

「本当に、申し訳ないことをした。——けれど」

なぜだろう。とても、懐かしい気がするのだ。

この声を、自分は確かに知っている。

もっと、ずっと前に聞いたことがあって。

「これ以上、自ら巻き込まれてくるのであれば、私も考えねばならぬ。そんな男に関わり合いになるのは愚かなことだ。森へお帰り、大地の娘——私はそなたを、傷つけないわけではないのだ」

でも。

自分が知っている声よりは、随分と時を経た声だと思う。

あれから、そう時間がたっているわけでも、ないというのに。

惑うキアラを、布を被った男はしばらくみつめていたようだった。

布のせいで、見えない顔。

けれど、確かにそのまなざしは交わって。

「……おうじ、さま……？」

キアラが小さく呟いたその声は、あまりに小さくかすれて。
通りを吹き抜けていった風に、まぎれて。溶けてしまった。

とおと、ひとつめ。

「おうじさま」

呼びかけとさえいえない、それは眩き。

けれど、口に出したその瞬間に、その言葉が何よりも正しいような、気がした。

ぴくり、と遠くにある、布を被ったその男の肩がわずかに震えたように思った。

けれど、風に溶けてしまったつぶやきは、彼の元まで届いたのだろうか？

不思議な沈黙がみちる。

ひどく長いような、それでいて一瞬のような。

風が吹き抜けて、ほんのせつな。時間さえも流れることを忘れたような感覚を覚えた。

「ロータス殿下。何を考えていらっしゃるのでしょうか？」

その、静かな空間を破ったのは、空気を読まない調子で紡がれた、カツツエの言葉だ。

今の今まで自分を盾にしていたとは思えないなめらかさで、カツツエはキアラの前へ半身を出した。

「貴様、こちらの方がどなたか心得ていながら、無礼な！」

イシエ、と呼ばれていた傭兵が唸るが、カツツエは面白がるように肩をすくめただけだ。

「それならば、ロータス陛下？」

くすくすと笑いながら、細い目をさらに細めるカツツエを、キアラはただみつめていた。

おうじさま、はロータスという名前なのだろうか？

殿下だの陛下だの。よく意味はわからないけれども、そんな物々しい名前は、あんなに寂しそうにわらっていたおうじさまには、とても似合わない気がした。

「王城におられるべきあなた様が、こんなところでなにをなさっておいですか？ 悪巧みならばぜひとも混ぜていただきたいですね」

「きさまッ！」

「黙れ、たかだか傭兵ごときの分際で。わたしと陛下の歓談の邪魔をするか？」

つかみ掛からんばかりの勢いで唸ったイシエにカツツエが放った一言は、先ほどイシエたちに追われて駆けて来たひよる長い男とはまるで別人が発したように厳しく響く。

「歓談ではなかつ、ヴェルヴァルグ」

また聞きなれない名が出てきた、とおうじさまが口にした言葉にキアラは眉を寄せる。

話の流れからいけば、ヴェルヴァルグというのは、カツツエのことになるのだろっけれど。名前が二つあるということなのだろうか？
とりあえず、わかるのは。

おうじさまも、カツツエも。仲良しには見えないということくらいだ。

「そもそも私は、大地の娘と話していたのだ」

以前よりも、もっと時を経て聞こえる声。

キアラは一步おうじさまのほうへと足を踏み出すが、警戒するイシエら傭兵たちのせいでそれ以上は進めなかった。

「おうじさま、なの？」

もう一度、問いかけてはみるものの、おうじさまは答えてはくれなかった。

「森へ、おかえり。大地の娘。私はそなたを、傷つけたくはないのだ」

ただ、先ほどの言葉を、繰り返すのみ。

くるしそうで、せつなくて。声の調子はその日と変わらないのに、自分の存在を乞うたあの日とは真逆に、今日は帰れと繰り返す、その声。

「ヴェルヴァルグ、そなたも。情報屋を気取るのもいいが、ほどほどにしておくがよかるう。首を突っ込みすぎれば、戻る道をなくすこともあるう」

「その言葉、そのままそっくりお返しいたしますよ」

人を食ったような調子でカツツエが言葉を返す。

「私だって面倒ごとは御免だが、友のたつての頼みとあらば、断るに断れなくてねえ。やる気のない猫が実は虎だったってわかる前に、陛下もおとなしくおうちにお帰りになられたほうが身のためだと思いますよ？」

ふ、とおうじさまが布の下で笑ったような気配があった。

「忠告はしたぞ、大地の娘。そして、ヴェルヴァルグ。次は、ない」
キアラの質問にはまるで何も答えないまま、おうじさまが踵を返す。

その背に追いつがりたいと思いつながらも、キアラは動けなかった。まるで足が地面に貼りついてしまったみたいだ。

——キアラが、私の味方でいてくれるのだと思うだけで、心強く在れるよ。

誰よりも、キアラを求めてくれた、おうじさまが。

今は直接顔も見せてくれなくて。

せつかく約束を守りにやってきたのに、ただ帰れというばかりで。

傭兵たちを引き連れて、おうじさまが去って行く。

カツエはのんびりとその背中を見送っていて、けれどキアラは結局、彼らの背中が角を曲がって見えなくなるまで、動けないままだった。

とおと、ふたつめ。

「君は殿下と知り合いなのかい？」

いつまでたつても、地面に張り付いた足は動ける気がしなかった。心にぽっかりと大きな穴があいてしまったかのようなのだ。

気持ちはずかすかとして、ちっとも埋まらない。まるで失敗して膨らみすぎたパンのよう。

そんな自分を黙ってみていたカッツェがようやく話しかけてきたのは、十分に時間が過ぎてからのことだったと思う。少し視界がうるんでいたから、目も少しくらいは赤かったかもしれない。

カッツェは気まずそうに目を細くして、さりげなくおうじさまが去っていった方角へと視線をずらした。

「殿下つて、おうじさまのこと？」

「君の王子様が誰かは知らないけど、さつき傭兵を引き連れていた、布を被った怪しい男のことさ」

「……さつきのひとは、おうじさまだともう」

顔を見たわけではない。

声だつて、昔とは随分違っていた。でも。

だけ。

確信めいた予感がある。

さつきの彼は、昔約束をしたおうじさまだ。

「まあ、詳しくは知らないけどさ。とりあえず殿下が王子様だった

のは、先々王の時代までだよ。それから3年前までは、王弟殿下。今、彼はロータス国王陛下と呼ばれることになっている。言うなれば、この国の頂点に立つ男さ」

こくおうへいか。

耳慣れないその言葉を、キアラは口の中でそつと転がした。

長老様のようなものだろうか、という疑問は思っただけで口には乗せないでおく。

そういうことは、ジンに聞いたほうが馬鹿にされないで教えてもらえそうだ。

「大地の民が人間の権力争いに興味があるとも思えないから、ざざつとはしよるけれども。先代の国王陛下下つて言うのが、ロータス殿下の兄君にあたる方だね。大変すばらしい方だったんだが、3年ほど前に崩御なされた。まだ50代とお若いのに、突然なくなってしまうわれたのだ」

宿屋の方へと歩を進めながら、カツツエはゆっくりとした口調でそう語った。

もしかすると、カツツエは前のこくおうへいかが本当に好きだったのだろう。

「あまりに突然身罷られてしまったから、いろんな噂が流れたんだよ。中でももっとも有力なのが、さっきの殿下が、兄である国王陛下を……というものでね。事実じゃないのかなあと私なんかは思っているわけなのだ」

なんとなく促されれば、地面に張り付いた足もようやくはがれた。カツツエの悲しみが、さみしい。

淡々と語られる、その言葉が、ひとつひとつ悲鳴をあげているよ

うな気がする。

「本来なら、母君の身分が低いロータス殿下は王位を継承しないはずだった。けれど、先王陛下の第一王子がまだ幼いというので、一時的に、殿下は王位を継がれたのだ。中継ぎ国王、とでも言おうか。先王陛下はよい治世者だったけれど、独裁者でもあった。指揮を突然失って、混乱した国を、殿下はよく治めたと、言えなくはないんだけど」

ふう、とカッツェはひとつ溜息をついた。

「先王陛下を、弑^{しい}したかもしれない彼を、私は許せないんだよ。突然お倒れになった陛下を、顔色ひとつかえずに見下ろしていた、殿下を――。弑していないと、なぜ言えるのか」

とおと、ふたつめ。(後書き)

弑する 王・親など目上の人を殺すこと、らしいです。
誤字修正しました。 10/30

とおと、みつめ。

キアラは黙って、口を閉ざしてしまったカツエをみつめた。
こくおうへいか、を殺してしまったかもしれないおうじさま。
でも、あんなにも優しくかったおうじさまが、大切な兄君を殺した
りするだろうか？

部屋へと戻る道筋をたどりながら、キアラはゆっくり考えた。
けれど、そんなことはキアラにはどうやっても知りうることは出
来ないことだ。

噂が真実かどうかなんてことを、本当に知っているのは、やはり
おうじさま当人をおいて他にはいないだろう。

「まあ、とりあえずさ。先だって、先王陛下の第一王子が成人した
んだ。成人したからには、王位を継げる——けれど、ロータス殿下
はなんだかんだと理由をつけて、王位を返上しなかった。痺れを切
らした王子殿下は、仲間を募って王位を奪還しようとして」

ここでカツエは言葉をいったん切った。

「あまり表向きには知られていないことなだけどね？ 奪還に失
敗したんだよ、王子殿下は。で、市井に下りて、ロータス殿下の手
を逃れようとして、どういう風の吹き回しか、ジインを頼った、と
いうことらしい」
「ジイン？」

先ほどから、繰り返される「王子」「殿下」という単語の意味に
ついて考えをめぐらしていたキアラは、突然カツエの口から飛び
出したその名前に目をしばたかせた。

おうじさまと、それについてきたいささか物騒な話に、何故だか登場したジインの名前。

「そうそう。ジインは今マリー殿下の足取りを追ってるんだよ」

「マリー殿下……」

話の流れから行くと、王子殿下はマリーのことになるのだろう。自分としては、おうじさまに会いにきたただけなのに、どうにもこころにも血なまぐさい話になっている。

「カツツエさんは、どうしておうじさまと知り合いなの？」

「知り合いつて言うほどでもないんだけどね」

部屋に戻ったカツツエは、女将に頼んで温かいミルクをキアラにくれた。

蜂蜜でもたらしであるのか、ほのかな甘さが口の中に広がる。

ソファに腰をかけ、カップを両手で包み込んで、キアラはジインをみつめた。

「私の本当の名前は、ヴェルヴァルグというんだよ。国政を王と共に司る、三貴族の一人なんだ」

重大なことを打ち明ける口調で、カツツエは教えてくれたけれど。キアラにしてみれば、よくわからない単語を並べられたに過ぎない。

けれどもせっかく教えてくれたことなので、わからないともいえずに、キアラはもう一口甘いミルクをすすった。

「私は、昔の約束を果たしにきたの」

「約束？」

「昔、森に来た人に約束したの。私がオトナになったら、必ず会いに行く。困ってたら力を貸す。私が味方になってあげるって」

「その相手がおうじさま？」

カツツエは持ち前の鋭さでそんなことを聞いてきたけれど。

同族のジインにさえ言っていないことを、知り合っただばかりの人間に話す気にはなれなかったので、一応沈黙をまもってみる。

「大地の民の約束は、護られるべきものだもの」

呟くように、そういえば。

カツツエは無言のまま顎をなでた。

でも、とキアラは少し思う。

マーリの言っていた敵が、さっきのロータス殿下で。
ロータス殿下が、自分の探していたおうじさまなら。

護ると約束したマーリと。

味方になると約束したおうじさまと。

どっちを助ければいいのだろうか？

ミルクを舐めながら、考えてみたけれど。

いい案はちつとも思いつかない。

膝を抱えて、窓から見えるお城を眺めて。

いつしかカツツエの存在すら忘れて、キアラはただ唇をかみ締め
ていた。

とおと、みつつめ。（後書き）

回収作戦、終了しませんでした…
が。次から新章になります。

なんだかぐだぐだしてますが、面白いと思ってもらえるように頑張ろうと思います><

ひとつめ。

「そういえば」

随分と長い間考え込んでいた気がする。

考え込んだ割には、まったくといっていいほど答は出なかったけれど。

カツツエは気長にぼんやりと外を眺めつつ、待っていてくれたようだ。

「カツツエさんは、どうして神殿にいつていたんですか」

「ん……調べ物？」

ぼんやりとしていたせいか、もしくは半分意識が夢の世界に飛びかけていたのか、カツツエの言葉に勢いはなかった。

「昨日の夜からなれない肉体労働をしていたから眠くってねえ」

ふあ、とジインの欠伸に負けなくらい大きな欠伸をひとつして、カツツエは軽く体を伸ばした。

「肉体労働？」

「神殿に忍び込んだといっただろう？」

「神殿？」

そういえば、そんなことをいつていたような気もする。

「神子の神殿だよ」

昨日、ジンとカツエがマリーが残した手がかりに関係があるとかどうかで話題にしていた神殿のことだろうか。

記憶を掘り起こしていると、カツエはさらにのんびりと口を開いた。

「何かありそうだって言うので、土地勘があるわたしとジンで様子を見に行ったんだよ」

「はあ」

「君は寝ていたし、一応女の子だから誰も部屋に入らないように鍵をかけた」

別に、聞いたわけではなかったが、カツエは部屋にいなかった理由をそう説明してくれた。

閉じ込められたのではないらしく。

開け方は以前わからないままだったが、一応ちゃんと内側からも開くらしい。

「それで、なにかわかったのですか？」

「あんまり収穫はなかったねえ」

首を回して肩周りをほぐす仕草を見せたカツエは、机の上のかわいらしい鉢に盛ってある焼き菓子らしきものに手を出した。

「筆頭巫女の姿が昨夜から見えないってことくらいかな」

「筆頭巫女？」

「神殿につめる巫女たちの中で、一番位が高い巫女のことだねえ。今は、マリー殿下の姉君にあたる、ユーリティカ王女がしていたと思っただけだね。お飾りの巫女が多い中で、彼女はホンモノだっていう話だけだ」

カツツエの薄い口の中に、焼き菓子軽い音を立てて消えていく。

「なんにしても、砂禍が飛来しようって言うこの時期に、姿が見えなくなるなんて平和じゃないねえ」

カツツエがいたいことは半分もわかっていないのだろうが、要はマーリのお姉さんがなくなったということか。

追われていたマーリと。

そのマーリと連絡が取れなくなったという事実と。姿が消えたというマーリのお姉さん。

話がわからなくても、これは充分に物騒な符号ではないのだろうか。

「マーリは、お姉さんを追っていったかも、知れない？」

「マーリ殿下が残したメッセージは、神子の神殿を暗示するものだったからねえ。可能性は充分にあるとは思っよ」

「マーリの、行方は？」

「それがわかれば苦労はしない」

忍び込んできたという割に、実は成果がなかったらしい。

まったく悪びれない調子で肩をすくめたカツツエは、部屋に常備してあったコップに注いだレモン水を一息で飲み干した。

「そっいえば、ジインは？」

ジインは大地の民だ。

カツツエと神殿に忍び込んで見つかったなら、明らかに運動が苦手そうなカツツエを逃がすために、自分が囹になる可能性が充分にある。

けれど、カツツエが戻ってきてから結構な時間が過ぎているのに、ジインはまだ戻ってこない。

もしかして、別行動をしていたのだろうか？

キアラの問いに、カツツエはああ、と今思い出したように肯いた。その手には、もうひとつ摘み取った焼き菓子がある。

この焼き菓子は、本当においしいねえとどうでもいいことを呟きながら、カツツエは答えた。

「今頃神殿兵につかまってんじゃないかな？」

は？

あまりに予想外のその答えに、キアラはただ目をしばたくことしか出来なかった。

ふたつめ。

「え、ちょ……っと、待ってください?」

今のは聞き間違いかもしれない。

友達というか、知り合いがつかまっているかもしれないのに、のんびりお菓子を食べている人はあまりいないと思う。

自分の考えに納得して肯き。

キアラは軽く息を吐き出した。

「すみません、ちょっと聞きまちがえちゃったみたい。もう一度いつてもらえます?」

「だから」

カツツエは困ったようにわずかに眉をよせ。

キアラをみつめて、ゆっくりと言葉を繰り返した。

「ジインは多分、神殿兵に捕まっていると思うよ」

「なんで?!」

繰り返されたその言葉に、キアラは今度こそ疑問の声を上げた。

「なんてと言われても。私は肉体労働系は苦手なんだよねえ」

少なからず咎める響きも混じっていたと思うのだが、カツツエは平然と肩をすくめるばかりだ。

「眠り男の本領発揮というべきか。追われている最中にいきなり眠いとか言い出すもんだから参ったよ」

「眠いつて……」

「まあ、眠り男だから、仕方がないといえば仕方がないんだけどねえ」

「そんなあつさり……。ジインは一度眠いとなると、もう起きていられないんですか？」

こうなつてくると、どちらを咎めるべきかということも、いささか迷う。

見捨ててくる方も見捨ててくる方だが、眠いといって非常事態に寝るほうも寝るほうだ。

命がかかっているとあればいくらか我慢もききそうなものだが、と問うたキアラに、カツエは器用に片眉をあげただけだった。

「意志の力でどうにかなるものだったら、眠り男とは呼ばれていないだろう」

あつさりといつてくれるが、はたしてそれだけで片付けていいものなのだろうか。

みつつめ。

それで、だ。

溜息混じりにカツツエは言葉を継ぐと、コップにもう一杯レモン水を注いだ。

「戦闘中にいきなり寝たから、見捨ててくることにしたんだよ」
そして、そんなふうの説明をしてくれる。

「そんな」

キアラは思わず顔をしかめた。

「殺されちゃったりしたら、どうするんですか」

キアラだって、人間の詳しい話を知っているわけではない。
けれど、大地の民だって、森や神域に故意に許可なく進入するものがあれば、警告の上危害を加えることもあるし、場合によっては命を奪うことだってあるのだ。

ましてや、今回。二人が忍び込んだのは神子の神殿だというし、明らかに不法侵入者である。
殺されたって、文句は言えない。

キアラのそんな思いを知ってか知らずか、カツツエは軽い調子で手をパタパタとふってみせた。

「だーいじょうぶだよ。眠り男は死なないから」

「いったい、何の根拠があつて！」

「ところ構わず眠らずにはいられない体にしちゃったんだから、神様だってそれくらいの融通はきかせてくれるよってことじゃないの

かなあ？」

マジメに受けとつてもいいのか、それとも話半分にしておくべきか。

悩んでいるうちに、カツツエは話が終わったものと判断したらしい。

「とりあえず、ここを出ましようかね。私だけだったら無理なお話だけれど、キアラさんがいるんだったら、ジインの回収くらいはできるかもしれないし。ロータス殿下だつて、まさか見張りもおかずに帰られてはいらっしゃらないだろうし」

「ジインを、助けに行くの？」

「行かないの？」

くすりと笑つて、カツツエはコップの水を飲み干した。

「マリーも、助けに行かないと……」

呟くように言い足せば、カツツエもそうだねえと肯いた。

「でもとりあえずジインを回収しないと、私たちは戦力不足だと思うのだよ。私は無粋な武器なんか手にして戦うのはゴメンだからねえ」

「ジインは神殿に？」

「たぶんね」

武器を持つて戦うのが無粋とか。

肉体労働は苦手とか。

知り合いが命の危機にさらされそうなときに、気にするような問題ではないと思うのだが。

とりあえず、突っ込むのはやめておいた。

適材適所。

出来る人が、出来ることをやればいい。

ヘタに手を出されても、たぶん。いざという時は足手まといなのだ。

ほうつりっぱなしだった荷物の中から、財布らしきものを取り出したカッツェに続いてキアラも部屋を出る。

太陽は中天から、少しばかり西に傾いていた。

よつつめ。Side:ジン

頬に、なにか冷たいものが当たる。

規則正しく落ちてくるなにかに、重い瞼をようやくと持ち上げれば。

その冷たいものは天井から落ちてくる水滴のようだった。

「う……」

なんだろう、体中が痛い。

痛む体をなだめながら、状況を把握するべく辺りを見回せば。

じめつと湿った石の床と、無骨な鉄格子が目に入る。灯がほとんどないため薄暗く、時折低いうめき声のようなものが聞こえた。

「あー……おれ、つかまったのか」

何をしていた途中だったかと記憶を手繰ってみれば、カツエと神子の神殿に忍び込んだ事実を思い出す。そういえば、逃げている途中で耐え難い眠気に襲われたのだった。

空気の匂いをかいでも、かぎなれないヒトの匂いとカビと湿気の匂いしかなかったから。多分カツエはうまく逃げる事が出来たのだろう。

運動神経は鈍いくせに、逃げ足と危険察知能力だけはすばらしい男である。

首を回して体をほぐす。

手足が動かしにくいと思ったら、手首と足首に鉄球のついた枷がはまっていた。

「さて、どうするか……」

逃げている途中で、結局眠気に耐え切れずに寝てしまったのだから、カツエはさぞ苦労したことだろう。それとも、さっさと見捨てて逃げてしまつて、特に害はなかったか。

カツエの正確から鑑みるに、後者な気がとてもして、なんとなくこめかみの辺りに手をやった。

とりあえず。

眠ってしまった状況から考えるに、ここは神子の神殿の地下牢の可能性が高そうだ。

宗教戦争時代の神殿地下でもあるまいし、地下牢などほとんど使用する機会などございせんわと笑つた筆頭巫女ユーリティカの白い笑顔を思い出した。

ございせんわ、といった割にヒトの気配がするのは。

清純無垢な顔をしてしらつと嘘を吐いていたのか、あるいは、ユーリティカの感知しない所で使われていたのか。

どちらにしろ、日々神子の神殿が見える、神殿横の資料館で働いてはいたものの。

神殿内部のことはほとんど何も知らなかったことに、今更ながら思い至る。

そういえば、キアラはどうしたろうか。

王都に出てきた疲れからか、眠ってしまったキアラを宿においてきたものの。

実を言つと、今回の仕事にキアラを関わらせることについては、少しばかり迷つたのだ。

あんなでもキアラは成人した大地の民のひとりだし、ある程度の

危機は自分で片をつけるだろうが。

けれど、ここは王都だし。

権力争いとは無縁に生きてきたキアラにとって、マーリが運んできた厄介ごとは理解しにくい事象だろう。

下手をすれば時期国王になるかもしれないマーリとキアラが関わることは、キアラがこれから平穩に生きていくには邪魔になるかもしれないと、ちらりと考えた。

迷った拳句、結論を先延べて。

キアラは宿に置き去りに、カツツエと二人だけでやってきたのだが。

それは失敗だったかもしれない、と少しばかり後悔する。
すぐ帰るつもりがこんなことになってしまったし。

「しまったなあ……」

カツツエが余計なことを、キアラに教えていなければいいのだが。
キアラが余計なことに首を突っ込む決意をしていなければいいのだが。

あまりにも、無垢な大地の民の娘。

手の中に閉じ込めて護っていくには、王都はあまりにも外野がうるさい。

今すぐにでも森の安全地帯に送り返してしまいたくて、ジインは深々と息を吐き出した。

いつつめ。Side:ジン

まあ、なにはともあれ、とりあえず。

今は出来ることをするだけだ。

ここを抜け出さないことには、マーリの手がかりをさがすことも出来やしない。

キアラは大地の民としてマーリを護ると決めたのだから、ある程度のマーリの安全が確保されないことには、断言してもいいが決して森へは帰らないだろう。

それならば、極力早く、キアラが成り行きで決めたマーリ護衛の仕事を横から手伝って片をつけてしまっただ。さっさと片がつけば、キアラの平穏な未来にも、あまり影響を及ぼさないものと信じている。

どっちにしろ。

不憫なマーリや、ユーリティカをほっておくことは出来ないのだから。

何とかしなければいけないのだけれど。

両手と両足を戒める枷が邪魔だ。

「ケイオス」

軽く瞳を閉じて、意識の底を探る。

いつもは不意に落ちてくる眠りで、強制的に引き摺り下ろされる道のりを、珍しく自分の意思でたどって降りていく。

知覚できる、暗い意識。

その果てしない意識の底の、さらに普段は表層にでてこない潜在

意識。

たゆたう夢と夢の間をゆっくりと降りていくような、その感覚。

「ケイオス」

もう一度、死すべき宿命の、神子の名前を口にする。
ケイオスがいるのは、ここよりもさらに深い場所。

『よう、どうした』

夢を不意に、突き抜けたような感覚。
急激に広がる闇が、ぼつかりと空虚な空間を作り上げているような気がする。

あいつも変わらず皮肉げな顔をした男が、いつものようににやにやと笑んでいた。

『ジイン、お前からここに降りてくるとは珍しいな』

幾分からかうような口調のケイオスに、ジインは軽く肩をすくめて見せた。

『好きで降りてきてるわけじゃないんだが。力を貸して欲しいんだ』

自分の裡に間借りしているような神の欠片に頼むのもあまり気が進まないが。

残念ながら、己の力だけでここから脱出できる気がしないのもまた事実だった。

別にこのままいたところで、せいぜいが処刑されるか拷問に遭わされたりするくらいだろうし。特に不都合があるわけでもないのだ

が、とりあえずこのじめつとした地下から抜け出て、放置してきたキアラの様子を見に戻りたかった。

あの頼りない娘は、王都にはあまりに不似合いだ。

カツツエが、キアラを保護してくれるような紳士ならばよかったのだが、墜ちていく者を見て楽しむ悪趣味さ加減を持っていることを考えれば、あまり期待は出来ない。

むしろ、面白がって、逆に渦中に引き込む恐れがある。

『力？別に死ぬわけではないんだ、殺されて捨てられるのをいつものように待ってればいい』

『今回ばかりはそういうわけには行かないんだよ』

『同族の、あの娘か？』

意識が半ば同化しているのだし、わざわざ問わなくてもわかっていそうなものなのだが。

いつもながら、ケイオスは意地が悪い。

『キアラは、森が似合っているよ』

溜息交じりに答えれば、ケイオスは満足そうに笑みを深くした。

『まあ、体を間借りしているわけだからな。力を貸すのも、やぶさかではないさ——ほら、還れ』

なんだかニヤニヤしながら、聞き覚えのある台詞をはいたケイオスは。

面倒くさそうに、追い払うような仕草で軽く手を振った。

毎度おなじみの、押し返されるような弾かれるような感覚に襲われて。

はっと目を開ければ、そこはもとの地下室だった。
ただ違うのは。

枷が塵になっていくことくらい。

瞬く間に、両手両足を戒めていた枷はさらさらと風化して、砂と
なって落ちていく。

部屋を仕切っていた頑丈な鉄格子までがさらさらと塵と化してい
ったのは、ケイオスのわかりにくいサービスだったのかもしれない。

むつつめ。

カツツエに連れられて、幾本かの裏道を抜け、大通りがあるき、屋台で買った軽い朝食兼昼食を取りながらやってきたのはお城のよ
うな建物だった。

白い外壁に、いくつかの塔。

「……おしろ？」

食べかけの揚げたパンをかじりながら、キアラは思わず呟いた。

王都にやってきた時に、大地の民によくにたおっちゃんに、お城だと教えてもらった建物と同じくらいに大きくて。白くてキレイな建物だった。

ただ、お城よりも開放感が高いかもしれない。

入り口は、細かな彫刻がどこされた一抱えほどもある柱が、たくさん並んでいた。

「いやあ、違うよ？」

のんびりとした口調で答えるカツツエは、建物の影からちらりと入り口の方を窺った。

入り口には、ぴかぴかした鎧をきた兵士が数人、いかめつらしい顔つきで前をにらんでいる。

手には、鋭い槍。

「ここは、神子の神殿だ」

「……ふうん？」

お城ではないということか。

首を傾げて瞬くキアラに、カツツエはもう少し言葉をたしてくれた。

「死すべき宿命の神子ケイオスを祀る神殿だよ」

「マーリのお姉さんが筆頭巫女をやっているところで、ジインがつかまつてるかもしれないところ？」

「そうだね」

カツツエがうなずくから。

キアラは少し空気のおいを嗅いでみた。

もしかしたら、ジインのおいがするかもしれないと思ったのだが、生憎と埃と砂と、嗅ぎなれないニンゲンたちと、カツツエの匂いしからなかった。

屋台のおいしそうな匂いもしたけれど、食べだすときりがないので、そこはあえて気づかないふりをしておく。

「見張り……いるけど、忍び込めそうだね」

じつと見ていると、見張りは案外ひまそうだ。

自分のほかにも見張りがいるという安心感からか、前を見てはいるものの、どうも集中力に欠けるといいうか。頑張っではいなさそうな印象がある。

「わたしはやめておこうと、昨日もいったんだけどね？」

「じゃあ、ここで待ってます？」

渋い顔をするカツツエにそう問えば、その細い目がさらに細くなつた。

「大地の民って言うのは、誰もがそんなに無謀なのかい？」

どうやら、昨日もジンと同じような会話をしたらしい。
見張りに視線を戻しながら、キアラは少しばかり首を傾けた。

「無謀も何も。隙だらけだから、行けそうなんですもん」

ななつめ。

カツツエは心底いやそうに溜息をついた。

その気持ちはまあ、わからないでもない。

恐らくカツツエは昨日、大丈夫だと言い張るジインに半ば強制的に連行されて、あぐくジインは途中で眠気に襲われて、耐え切れずに眠ってしまったのだらうから。

「私は眠気に襲われないので大丈夫です」

カツツエを安心させるべく、そうつとそう言ってみる。

一人で行く、というのももちろん選択肢のひとつではある。けれど、カツツエは昨日神殿の中に入っているのだ。それなら一緒に行ったほうが、少しくらいは内部のことがわかるのではないかと思うのである。

「……いやですか？」

カツツエが何の反応も示さないので、キアラは声のトーンを落としてそう聞いてみる。

しょぼんと耳までたれたのは、別に意図してのことではない。

野山で駆け回るのは得意だが、建物の中というのが苦手なのだ。

匂いのもとをたどりにくいし、なにより視界が狭い。物音だって外よりずっと反響する。

「ああああわかったよ！」

しょぼんとしたままカツツエをみつめていると、半ばやけくそ気味にカツツエは声を荒げた。

「わかったよ、いくよ。行けばいいんだろう?」

「……そんなにいやなら、一人で頑張ります。迷うかもしれないけど、ニンゲンにはつかまらないだろうし」

迷っても、本気で駆ければ、ニンゲンは大地の民に追いつくことなど出来ないはずだ。

行き止まりに迷い込んだところで、ある程度なら、力で追い払って見せる。

「いや、いいよ。いくよ。ジンも昨日見捨ててきたからね……」

ジンがいないことについても飄々としているように見えたが、少しは気にしていたらしい。

自分を納得させるようにカツツエはつぶやくと、はあと深く息をついた。

「まあ、ジンはもともとから助けにいくつもりだったんだけどさ。たびたびいつているけど私は肉体労働が苦手なんだよ」

「……忍び込まないで、ジンを助けるつもりってことですか?」

「見張りに立つてる神殿兵が、いつもの子だったら、お友達特権で通してもらえるかなあと思ったんだけど」

「お友達特権?」

「そう、うちの屋敷で働いてるメイドの弟がここの見張りだったんだよねえ」

なんだかよくわからないが、知り合いの兄弟で顔見知りだから、ということだろうか?

首を傾げて意味を考えると、カツツエはもうひとつ溜息をついた。

「でも、昨日も今日も見張りに出てないんだよねえ。いつもより兵士の数も多いし……」

「その割には暇そうですけどね？」

「一般人には！ あの数だけで充分な威嚇になるだろう？」

イッパンジンが何を指すのかはイマイチわからないが、少なくとも大地の民の脅威にはならない。

けれど、彼らを見ただけでカツエがいやそうな顔になるくらいだから、あまり戦闘に慣れていないニンゲンには、少しくらいの効果はあるということだろう。

「……よく、わかりませんけど。とりあえず、ジインはどこにいると思いますか？」

「そこなんだよねえ。そもそも神殿に罪人を捕らえておく場所はないはずなんだ。けれど、牢がある兵舎のほうに、ジインらしき男が捕らわれたという情報はないし」

ずっと一緒にいたはずなのに、いつのまに調べたのだろうとキアラは不思議に思ったが、カツエがマジメな顔つきをして考え込んでいたから、水をささないでおくことにした。

「あと、可能性があるのは、神殿の地下、かな」

「地下？」

「今も使われているのかはわからないんだけど、昔宗教戦争って言う馬鹿らしい争いがあった時代があつてね。そのころ、異教を信じる人間を捕えて置く場所が地下にあった、という記録が残っているんだ」

やつつめ。

「よし、じゃあきつと地下ですね。地下室を目指しましょう」

あつさりとキアラがそう決めると、しぶしぶといった様子でカツツエも頷いた。

辺りを見回せば、神殿の周りにはえている木々の下に、いくつかの石があるのが目に止まる。神殿兵の目に付かないように気をつけて、キアラは比較的大き目の――ひとの拳ほどの石をふたつ、みつ手にとった。

「カツツエさん、私が気を引きます。合図をしたら、先にいってください。適当なところで隠れていてくだされば、すぐに見つけます」

カツツエはさらに嫌そうな顔をしたが、キアラは構わずカツツエから距離を取り、手にした石を神殿兵の右斜め後方に向かって投げつけた。

神殿兵たちの死角について、石は綺麗に弧を描いて飛び。

茂みに落ちて、がさりと大きな音を立てる。

「行ってください!」

声を殺してそう叫び。身振りでカツツエを促すと、カツツエは相変わらず手足が邪魔そうな様子で駆け出した。

同時にキアラも飛び出して。

音に気をとられた神殿兵たちに、すばやく殴りかかる。

鞘をしたままの大剣で、みぞおちの辺りを軽く殴ってやれば、神殿兵たちは一言うめいて崩れ落ちた。

手加減も一応したし、そうそう被害はないはずだ。

ポケットに忍ばせていた紐で、意識をなくした神殿兵たちを手早く縛り上げ、とりあえず茂みの中へと引きずって行って転がしておいた。

口の中にも一応布きれを突っ込んでおいたが、猿轡をかませることとはしないでおく。

おそらく、忍び込むという目的を達する間くらいは意識がないと見込んでのことだった。

こちらの目的に支障さえないのなら、彼らにしてみても、早く助けてもらえたほうが良いに決まっているのだ。口の中の布さえ吐き出すことが出来れば、声を上げて助けを求めることも出来るだろう。

神殿の入り口に足音を殺して忍び込む。

床はぴかぴかに磨かれた鏡のような白い石で、大理石状のグレイの模様が入っていた。

入り口にはあんなにも兵士が多かったのに、一歩中へと踏み込めば、今度はニンゲンの気配すらもない。

しんと静まり返った空間に、ただ幾本もの柱がそびえたっているばかりだ。

「……いやなかんじ」

つぶやいた、その言葉に特に他意はない。

空気はただぴんと張り詰めて、冷たく澄んでいる。

もし、空気を視覚化できるのなら、きっと鏡のような湖を思わせるに違いない。

けれど、澄んだその空気は、なぜだか不穏な気配を底に忍ばせているような気がした。

「キアラさん」

匂いをたどるまでもなく。

カツツエは柱の影で待っていてくれたらしい。

低くよんで合流すると、ただその柱の間のさきにある、大きな扉を指差した。

「地下には多分、筆頭巫女の居室からいける」

「それが、あっち？」

「わからないけれど、筆頭巫女なんてのは、この神殿で一番力を持っているんだ。普通、えらい人の部屋って言うのは、一番日当たりがよくて、一番大きな部屋だと思うんだよね？ ついでにわかりやすくして」

「よくわからないけど、カツツエさんについていきます」

森で育った自分と違って、カツツエは建物にも詳しくに違いない。そう思って宣言すると、カツツエはまた嫌そうな顔をしたが、とりあえず先に立って歩き始めた。

ここにつめ。Side:マール

気がつく、なぜか豪華な部屋にいた。

城の中のように、真っ白い壁。たつぷりと布を使って作られた厚いカーテン。毛足の長い絨毯に、貴族の姫が好んで用いるような、天蓋つきの大きな寝台。

「……どこだ、ここは」

城の中の部屋のような造りだが、城でないのはわかっている。眉を寄せて呟いて、ぐるりと部屋の中を見回す。

城に昔からすんでいるという事実もあって、恐らく見たことのない部屋はないだろうが。残念ながら、この一見城の中の部屋のようなこの部屋の内装には、まったくもって見覚えがなかった。

ここがどこかはまったく予想がつかない。

ついでにいうと、拘束されているわけでもない。

服は、町民たちが着るような、意識をなくすまで着ていた服を着たままで。

服と部屋のギャップが、妙に目に付いた。

「そもそも、なんでここにいるんだ」

頭の芯が重い気がする。

張り切って動いてくれない思考回路をなだめすかして記憶をたどる。

姉を乗せた駕籠を追って、門番の目を盗んで、門から王都の外に出たのはまだ晩のうちだった。

王都の外で、馬車にでも乗せられたらどうやって追って行こうと

考えをめぐらせていたのだが、幸いにも、姉がすぐに馬車に移し変えられることはなかった。

王都の外には、広い平原がひろがっている。

そもそも王都は、すこしばかり小高い丘の上に広がっているのだ。その外側は、前述したような広々とした平原と、蛇行しながらも穏やかに流れる川と、川に沿って下っていった先にある、大地の民が棲むと言われる巨大な『森』。その森が切れる先には、地の果てへ続くような断崖があり、海が広がっているという。

つまり。

話をまとめるならば、こちら側は、誰の領地でもないということだ。

道理で、脳裏に地図を描いたときに、誰の名前も浮かんでこなかったはずだ。

法の上ならば、ここは王の領地。

けれど、その王さえ手出しを出来ない、自然の大地。いくつかの村があることにはあるが、先住種族の力を借りて細々とやっている彼らに、王への忠誠や税を払う意志などあるわけもない。下手にそれを咎めて兵を出せば、返ってくるのは人間よりむしろかに身体能力に優れた先住種族の報復ばかりだ。何の益もない。

そういった事情によって、放置され続けた丘をみつめて、少しばかり溜息をつく。

平原だということは、隠れる場所がないということだ。

今は堀の影に身を潜めてはいるものの、このまま駕籠が王都から離れていけば。そしてそれについていくならば、ほどなく駕籠を担ぐ傭兵たちに、自分の存在が知れてしまうことだろう。

「……ねえさま」

どうすればいい。

どうやれば、気づかずに追える？

頼みのジインはまだ来ない。

せめて、駕籠の行方を見届けようと、塀の影から目を凝らした。
すると。

駕籠は、川沿いではなく。

どちらかというと、先住種族たちと人間の領土の境界地——出てきた門から、王都沿いに進んでいくようだった。

これはもしかすると、うまく追えるかもしれない。
軽く呼吸を整えて、塀沿いに、そつと駕籠を追う。
そのときだった。

背後からのびてきた太い腕が、体の自由を瞬く間に奪ったのだ。
驚いて、硬直したのは一瞬。

すぐに肘を相手のみぞおちにでも打ち込んでやろうと抵抗したが、それよりも早く。

つんと目の奥に残る刺激臭をはなつ布で鼻と口とを覆われた。
呼吸をとめて抵抗を試みるも、ほどなく意識が薄れて、暗転したのである。

1111のつめ。Side:マリー（後書き）

久々のマリー視点です。

断じて存在を忘れていたとかではありません……

昨日更新分の、間抜けなミス修正しました。

とお。Side：マリー

「つまり、だ」

静かな部屋の中に、自分の声だけが妙にはっきりと響いた。

「ぼくは、さらわれたのか？」

だれに？と言うのはわからない。

ただ、あまり歓迎すべき状況でないことだけは確かだ。

連れ去られた姉と、自分と、背後から来た何者かの位置関係から考えるに。

姉を連れ去った連中と、自分を拉致した連中が、協力関係にあるというのは、少し考えにくい。

まあ。

姉を連れ去った連中の仲間が、なんらかの事情で別行動をとっており、あとから追ってきたときに。こっそり後をつけている風だった自分に気づいて捕獲した、という可能性もなくはないのだが。

なんとなく、違う気がする。

明確な、理由など何もないのだけれど。

ただ、なんの目的もなくさらったのだとも思えはしない。

着ていたものこそ、そのままだが。

あまりに、整えられた、豪奢すぎるこの部屋。

それも、王族が使う部屋の調度にあまりに似た家具。

室内。雰囲気。

これはもう、どう考えても、自分が先王の息子マリーであることを知っているとしか考えられない。

なんの理由があるかなんてことは、さっぱりわからないのだけだ。

ひとつ、確信を持つて思えることは。

これを画策したのが、おそらく、今現在王の位にある、ロータス叔父ではないということくらいだ。

今現在敵対している人物を誉めるのもあまり気が進まないが、叔父が囁んでいるならば、もう少しこの部屋は趣味がいいはずだと思うのである。

明らかに、城に似せて作られた部屋。

けれど、何かが違う、趣味の悪い部屋。

「……気持ちわる」

思えば、ここは王の部屋に似ている気がする。

父がまだ生きていたころ。遊びにいった、父の居室に。

まあ、格段にこちらのほうが趣味が悪いのだが。

いったい、自分をさらった人間が、どういった意図を持っているかわからないことには。

どうにも手のうちようがない。

あのお人よしの大地の民は、どうしただろうかと。

ふと、自分が強制的に巻き込んだお人よしの男を思ってみる。

そろそろ、自分が残した暗号には気づいてくれただろうか。

姉の救出に動いてくれているだろうか。

できればそのついでに自分のことも助けて欲しいものだが――

こうなつては、それもむずかしいかもしれない。

ごろんと諦めて寝台に寝転んで、天蓋の内側をみつめる。
そこには、空ろなる存在《もの》、創世の神、セリヌンティウス
が己の存在に気づいて孤独に涙する、という内容の宗教画が描かれ
ていた。

その涙をみつめて思う。

死すべき神子、伝説上のかのひとは。

自分の存在を疎んだりはしなかったのだろうか。

自分が死すべき宿命を負って生まれてきたから。

世界もまた、いつか終焉を迎える宿命を負ってしまった。

姉が予知した砂禍さかの飛来は、終焉の前兆だといわれる。

くわしいことは自分もよく知らなかったが。

砂禍は、滅びをもたらす神子の欠片だ。

落ちた周辺を、命の芽生えぬ大地にかえてしまっ、わざわざいの
けら。

「叔父上……」

砂禍など、飛来しなければよい。

死すべき宿命の神子も。最初からいなければよかった。

セリヌンティウスが己が孤独に気がつかなければ。

世界は、生まれなかったかもしれないけれど。未来永劫、変わる
ことなくいられたのに。

「……おじっえ」

まなじりから、こぼれおちた何かが、こめかみの辺りに流れ落ち
るのを自覚する。

昔。

父もまだ、存命だったころ。

自分は、気さくな叔父が大好きだったのだ。

いつもかなしげな表情をたたえているその顔が、自分にはやさしい笑みをたたえてくれるのが嬉しかった。忙しい父に代わって、よく遊んでもくれた。

初めてのった馬も、叔父がくれたものだったし。

一緒に遠乗りに行った事だってあった。

本当は、叔父と王位を争いたくなんてない。

叔父はよく出来る人だから、国をうまく治めてくれるに違いない。

けれど、いつしか周りに流されて。

気がついたら、叔父と敵対せざるを得ない状況におちいていた。いつの間にか、叔父との間には深い溝が出来。

王位を得なければ、自分が死んでしまうというような状況にまでおちいつていた。

いくら後悔しても、時は巻き戻らない。

自分は、死にたくなかったのだ。

それならば、叔父を殺して、王位を奪うしかない。その思いは、今現在も変わらない。

久しぶりに、深く自分の心を分析した気がする。けれど。

もう戻れないところまできているのだ。

ふかくふかく、息を吐き出してみる。

少しくらいは、このやりきれない思いが吐き出されるといい。

がちやり、と鍵を開ける音が響いたのは。
ちよつどそんなときだった。

とおと、ひとつめ。

カツツエと合流して、神殿の中を歩く。

空気がぴんと張り詰めて、居心地はこの上なく悪い。

嵐の前の静けさとか。なんだかそういう不穏な言葉がぴつたりとくるような雰囲気だ。

誰にもあわず、まっすぐ廊下を歩く。

カツツエの足取りに迷いはなく。いくつか廊下が交わるところもあつたけれど、立ち止まることさえしないで、ただひたすらにまっすぐに進んだ。

進めば進むほど。

不穏な空気が色濃くなっていくような気がする。

肌が、ぴりぴりとする。たとえば猫が、体中の毛を膨らませるように。産毛までがちりちりと総毛立つような気がするのだ。

このまま進みたくないというのは、本能だろうか。

明確な根拠はなく。

ただ、気の進まなさが。

歩みをおそめる。

歩くのがそう早いとも思えない、カツツエとの距離がどんどん開いていく。

空気が体にまとわりついて、動きを阻害するかのようだ。

とろみのあるスープの中でもがけば、こんな気持ちに味わうことが出来るかもしれない。

「カツツエさ……」

けれど、さすがにこれ以上間があくのは危険だ。

そう判断したキアラが、声を上げようと口を開く。

だが。

カッツェを呼び止めることは出来なかった。

濃度の高い空気が、声をも阻む。

そして。

骨ばった手が。

なんの害意もなく、のびてきて。口をふさいだから。

「キアラ」

その手を払いのけようとする、その動作さえも。緩慢になる。

拒絶が遅れ、そのまま腰を引き寄せられる。

懐かしいにおいが鼻先をかすめ、キアラは相手を押しのけようとしていた、その力を思わず緩めた。

「……キアラ。キアラなんだろう？」

かすれた、声。

今にも泣き出しそうな調子で、ささやくように、名が繰り返された。

体を拘束してくるその手さえ、かすかに震えているような気がする。

懐かしくて、せつなくて。抱きしめたくて。

押しのける代わりに、キアラは。

そっと相手の服をつかんだ。

とおと、ふたつめ。

体の距離が近い。

鼓動さえも、あまりに近く感じる。

腰を引き寄せられたまま。

キアラはそつと眼差しだけをあげて、男をみつめた。

「おうじ、さま……？」

男は、ひどく切なげな顔つきで。

ただこちらを見下ろしていた。

口をふさぐ手は、いつしか力なく体の横に下ろされていた。

「なぜ、ここまで来てしまったんだい。来るなといっただろう」

呼びかけにこたえることはしないで。

男はいつそ苦しげにさえ見える様子で眉を寄せる。

懐かしいにおいが、胸いっぱいにひろがって、キアラはなんだか泣きたくなった。

いったいなにが、どうしてしまったのだろう。

匂いも、雰囲気も。なにもかもが、この男をおうじさまだと告げているのに。

病的なまでに白い肌も。

月の光を集めて編んだような、薄い金色をした髪の毛も。

空のように青い青い青すぎる瞳も。

優しく、切なくて、寂しそうなその面差しも。

たしかに、紛うことなく彼なのに。

「どうして……？」

キアラの予感、確かに当たっていた。
おうじさまは、さつき宿屋の近くでカツツエを追っていたロータス殿下だった。

「どうして、なの……？」

彼の服をつかむ手が、かすかに震えているのがわかる。
問えば、彼はひどく切なそうに瞳を伏せた。

——忘れなくても、時間は流れる。

その時、脳裏をかすめたその言葉が。すべてを物語っているような気がした。

森であった人に会いにきたのだと、キアラがジンにいった時だ。
ジンは、すべてを諦観したような顔つきで、そんなことを言わなかったか。

会えるといいなと、まるで会えないことが決まっているような口ぶりで、確かにそう言ったのだ。

「じ、かん……？」

「君は、本当に変わらない」

自嘲するように、彼はぼつりと呟いた。
いとしむようにキアラの髪をなでる手つきはあの日となにもかわらないのに。

彼の周りだけが、時間を重ねたみたいに。

わずか、ほんの数年のことだった。そのはずだった。

まだ自分とそう年の変わらなかった、二十歳前の青年は、もう。壮年の、五十過ぎとも取れる風貌になっていた。

「すまない。君はもう、来てくれないのだと、私は思っていたのだ」
「いったい、あれから。」

おうじさまにとって、どれくらいの時間が過ぎた？
すべてにおいて、平等に時間というものは流れるのではなかったのだろうか。

「本当に、すまなかった。君の、純粋な約束を。誇り高き大地の民の、約定を。疑ってしまった」

悔いるようにささやかれるその言葉を、キアラはただ音の連なりとして聞いていた。

頭の中がぐるぐるとして、まるで意味を捉えられない。

なにが言いたいのかも、よくわからない。

ただわかるのは。

彼がなにかを悔やんでいるということと。

自分には訪れなかった時間の流れに、彼はすっかりと流されて。年を重ねてしまったということくらいだ。

とおと、みつつめ。

「うたがった……？」

髪の上を、おうじさまの手がすべる。

優しく梳いてくれる、なつかしいその感触。

幼子のように目をしばたかせて、キアラはただ彼をみつめた。

「そうだ。本当に、すまない。私が森を出なければいけなかった、あの日。君の姉上が言っていたのだ。妹が——つまり君が。私のもとに来ることはないと」

彼の言葉は淡々と紡がれる。

そこには、憤りも。恨みも。なにもない。

「どついうこと？」

数年前の、あの日。

キアラは確かに約束したのだ。

成人したら、きつと王都に行くと。彼の味方になると。

自分よりもずっと大地の民らしい、姉たちが。

大地の民が約束をする意味を知らないはずがないというのに。

「行きたくても行けないのだと聞いていた。私はそれを、君がまだ成人していないせいだと思っていた。だから——」

いっそう遠い目をして、彼は少しだけ瞳を伏せた。

腰に回されていた手がゆっくりと下ろされる。
髪をなでていたても、最後に惜しむようにひとなでして。そっと離れた。

「3年たち、5年たつても待っていた。成人すれば、きつときてくれると思って、ずっと待っていた。けれど、君は来なかった。10年たつころにはきつとも来ないのだろうと憤りながらも君を待ち、20年たつころには、待つことに疲れていた。味方が誰もおらず、一番つらい時期はそのころには過ぎていた。王弟として、穏やかな日々を送っていたよ。君のことも、正直忘れかけていた」

「いったい、どういうことなのだろう。」

時間は誰のもとにも、等しくやってくるはずなのに。

キアラの、わずか数年が。彼には違ったということなのだろうか。

離れた手を、さみしく思った。

昔のように、もっとなでてくれればいいと思った。

けれど。

時間の隔たりは多分。それ以上の溝を、自分と彼の間に生んでしまったのだ。

「兄が王位を継いで。子供が出来て。30年が過ぎるころには、大地の民が棲まう森へ行ったことさえ夢のことのような気がしていた。そもそも、あの、世界樹の森は。人間の立ち入りを固く拒む土地だから。あの日々が、夢だと思ってもかまわないくらいに、平穏で優しい日々だったのだ」

「おうじ、さま……？」

平穏で、優しい日々だったというのなら。

なぜそんなにも、哀しい顔をしているのか。

あの日見たときよりも、ずっとずっと。寂しそうに笑うのか。

「3年前に、兄が亡くなって。平穩は崩れてしまった。かわいかった甥までも、私の命を狙うようになって。部下が甥を追ったら、街中に君がいたと報告してきた。——ねえ、キアラ」

吐息のように、彼はキアラの名前を口にした。

「どうして、マリーのところにいるんだい？」

とおと、よつつめ。

おうじさま、と。呟いた声は、言葉にはならなかった。
寂しげなまなざしが、自分を見下ろしている。

「やっと会えたのに、君はマリーを選ぶのかい」

その言葉は、別段咎める響きは持っていなかった。
ただ哀しくて。

ただ切なくて。
ただ——それだけ。

「マリーを選ぶのなら。わたしは——」

呟きながら、自分に向かってのばされた手を。
反射的に避けた。

——避けてしまった。

殺意を向けられたわけでも。害意を向けられたわけでもないのに。
とっさに体が動いてしまった。

ほんの一瞬。おうじさまの瞳は見開かれて。ついで、静かに伏せ
られた。

「そうか」

「おうじ、さ……」

「いいのだ、キアラ。それは、仕方のないことだ」

あおい、あおいまなざしが。

再びゆつくりとこちらを捕える。

名前を呼びたいのに、それはもう言葉にすらならなくて。

ただ、泣きたいくらいに悲しかった。

別に。マリーを選ぶつもりはなかった。おうじさまを選ぶつもりもなかった。

二人が敵だったらどうしようとは、確かに思ったけれど。
おうじさまの口調に、マリーへの憎しみは感じられなかったから。
だから。

「――森へ、お帰り。キアラ。今ならまだ、君を見逃すことが出来る。君のようにまっすぐな目をしたひとには。ここは悲しすぎるよ」
「どうして」

ほんの一瞬の拒絶に、おうじさまは何を見たのか。

くちびるをかみしめて、問えば。彼は自分が痛いような顔をした。

どうして、そんな顔をするの。

どうして、そんなことを言うの。

伸ばされた手を、思わずよけてしまったのは。

おうじさまのことをきらいだからじゃないの。

そんなことを、言わないで。

そんな悲しい顔をしないで。

私は、ただあなたに会ったために、ここまで来たのに。
私はまだ、約束のひとかけらさえ。果たしていないのに。

「人間の社会は複雑だからだ、キアラ」

胸の中で渦を巻く、たくさんの声。疑問。悲しみと、涙。

もてあまして立ち尽くしていれば。

答える声は、背後から聞こえた。

伸びてきた腕が、あっという間にキアラの体をからめとる。

「相手を憎んでいても、手を組み。相手をいとしんでいても、その命を奪う。おれたちには理解できない生き物だからだ」

安心感のあるぬくもりを、背中に感じる。

もつと悲しい顔つきになったおうじさまの顔をみつめれば、彼はただゆっくりと瞬いた。

その瞳が、かなしさと絶望を映して。

ふと。昔のように寂しくてたまらないのに、優しさに溢れている。不思議な笑みを浮かべた気がした。

とおと、いつつめ。

ジン。

同族のにおいは無条件に安心感をもたらす、そんな気がする。けれど、そう思ったのは一瞬だった。

「その通りだ、キアラ。森へ帰るといい」

「おうじ、」

「よしんだ、キアラ」

「離して、ジン！」

おうじさまと。背後にいるジンが。

なぜか結託して、自分をおうじさまから引き離そうとする。

伸ばされた手を、なぜか避けてしまったけれど。別に、それは何か意図したわけではなく。

「離して！ 会いにきたのに！！」

助けに行くはずだったジンが、なぜ唐突にここにいるのか。

先に行ったはずの、カツエはどこにいったのか。

ううん、そんなことはどうでもいい。

それよりも、どうして邪魔をするの？

おうじさまから、森へ帰れと拒絶された孤独感は、ジンのぬくもりにほんの一瞬。癒されなかったとは言わない。

でも、それに安心してはいけないのだ。

背後に甘えたいわけじゃない。

今は、おうじさまに。きちんと気持ちを伝えなければ。

そんなにも、悲しい顔をしているおうじさまに。笑ってもらいた

いのだと。

そんな顔をさせるためにきたのではないのだと。
きちんと、最後まで伝えたいのに。

ジインの腕を振りほどこうとして力をこめるのに、力強いその腕は、まるでびくともしない。
叩いても、ひっかいても。ジインはただ抱きしめ続けるだけ。

「おうじさま、私、会いにきたのよ？ 成人する日を指折り数えて待ってた！」

あの日。ふらりと森にやってきた彼を、好ましいと思った。
それはたぶん。恋愛感情とか、そういうものとは少し違って。ただ、なんとなく好きだった。

一緒にいた時間。
一緒に笑ったこと。
話したこと。

やさしい雰囲気。
心地いい時間が、静かに流れて。それがもっと続けばいいと思っていた。

「そんなに時間がたってたとか、思わなかった。どうして、どうして三十年も経ってるの？！」

だから。
困っているのなら、助けようと思った。
味方になろうと思った。
すべてが円く収まったら。おうじさまはきっと、もっと屈託なく笑って。

もっとやさしい時間が流れると、無邪気に信じていた。

「どう、して……」

熱い何かが頬を伝って落ちていった。

視界がゆがむのは、なぜ。

おうじさまが、まるで自分が苦しいような顔をして、こちらをみつめ続けていた。

「異種族間の婚姻は、防がれるべきだと思ったのだろう」

背後から抱きしめるジーンが、低くそう言葉を継いだ。

とおと、むつつめ。

「……イシュゾクカンの婚姻？」

「まだ幼い、わが同胞。お前の心を知りつつ、森を閉ざした長老たちを、おれは責めることは出来ないよ」

頬を伝う涙を、ジインの太い指が、ためらいながらもぬぐっていく。

けれど、涙は次から次へとあふれ、自分でも不思議なくらいに止まる気配を見せなかった。

「大地の民、わたしはお前を知っている。神子の神殿、資料館の男だな」

少しばかり、かたいおうじさまの声音が、響く。

ジインの腕がほんの少し緊張をはらんだけれど、ジイン自身が答えることはなかった。

「異種族間の婚姻とは、どういうことだ」

「……たとえば。犬が猫を伴侶に選ばないように、大地の民も普通は人間に興味をもたない。けれど、

ごく稀に。人間を伴侶に選ぶ者もいるんだよ。まあ、大地の民は寛容だから、別段それ

だけならば、長老たちも森を閉ざしたりはしなかっただろうさ」

いつか、種族の違いに泣くかも知れない幼い子供を憂えはしても。

「ただとき、相手が君なら。大地の民としてもほつつておくわけに

は行かなかっただろう。ロータス陛下。君にキアラを……大切な一族の娘を渡すわけには行かない」

ぴりぴりと、空気が張り詰めていく。

口を挟めないまま、ジンとおうじさまの会話を聞くしかないキアラをぎゅうつと力をこめて抱きしめて。

「そしておれも。キアラと出会ったんだ。君なんかに渡しはしない」
「……ジン？」

不穏な空気が重苦しくて。
キアラが戸惑った声を上げれば、ジンは呼びかけにこたえる代わりにさらに腕に力をこめた。

「キアラも。かけらも。君には渡さない」

宣言するようなジンの声が、背中から腹の底へと深く響く。

「宣戦布告というわけか」

「そんな大層なものじゃないさ。ただ、渡さないといっているだけだ。大地の民の総意としてもね」

大地の民は、おうじさまを嫌っているというのだろうか。

こんなにも、せつなくわらう、かなしいひとを。

弱きものをたすけることを身上とし、助力を仰がれればまず断らないはずの大地の民が。

おうじさまを助けなかった、つまりそういうことだろうか。

「おまえと同じことを、三十年前にもおまえたちの長老からきいた。

だが、わたしはキアラの言葉を信じてただ待っていた。待つことに、疲れたことも確かにあるが。——そうして、キアラは確かに私のもとへとやってきた。これはつまり。おまえたちの負けだということになるのではないのか」

「まだ、負けてはいない。キアラは渡さない」

キアラの意志を無視して、二人の会話は続けられていく。

「ひとつ、聞きたい。森を閉ざすとはどういうことか」

不毛な会話はしばらく続き。

ようやくおうじさまが、違う話題を口にした。

「言葉通りだ。森を閉ざせば、なんびとたりとも、大地の民の里へは来れなくなる。たとえ、同じ大地の民だったとしても、だ。時間の流れが、道を閉ざす。里の中と外では、流れる時間の速さが異なるのだ」

答えるジインに、空気がまた少し、重くなった。そんな気がした。

ひとつめ。Side:ジン

厄介なことになった、と思う。

腕の中で不審げな顔をしているキアラを、ただきつく抱きしめて、ロータス王をみやった。

三十年ほど、閉ざされていた『森』。

久しぶりに開いたと思ったら、森から出てきたらしい同族は、まだ成人の儀さえ済ませていないんじゃないかと思うほど、幼い心をした小娘で、誰かに会いに来たという。

けれど、当人によれば、それは数年前だというし。

外にいた自分からすれば、森にやってきた誰かが来たというのが、数年前だということはありえないことだということとはるくに考えなくともわかる。

森の中にいてさえ、閉ざされていることを知らなかったキアラ。

それはつまり、森を閉ざした食えない長老たちが、キアラにそれを知らせなかったということだ。

もつと言えば。

長老たちはもう二度と、キアラとその誰かを会わせたくなかったということになる。

なぜ？

そんなことはわからない。

けれど、推測することだけならできる。

大地の民の、護るという約束と。

その誰かの、危険性。

報酬の絡まない、護る約束は、相手を伴侶に選ぶことに他ならな

い。

伴侶と定めた相手には、命をとんでも尽くすのが、大地の民の、誇りだ。

かわるものなど、何もない。

キアラは、おそらく。知らぬまま、ロータス王を選びかけたのだろう。

力になると。その身を護ると。

長老たちが、そしておそらくそれを危ぶんだ。

大地の民は寛容で、異種族間の婚姻にだって、そう目くじらを立てるわけではない。

それならば、危ぶんだ理由は他にある。

それは、森を閉ざしてしまうほどの理由。

もしかしたら、軽く百年くらいの時間を閉じたまま過ごすつもりだったのかもしれない。

中から、外の時間ははかれないのだから。

もう二度と。キアラが、彼にあわないように。

「聞きたいな」

「なにをだ」

「……森を閉ざすほどの、どんな厄介ごとを君が持ち込んだのかということがさ」

見たところ、キアラに特別な力など何もない。

ごく普通の、無垢すぎる大地の娘だ。

かりに、この王が。彼女を手に入れたとしても。特になにか損害があるとは思えない。

もつとも、損害があるうがなろうが。
キアラを渡す気などはさらさらないけれど。

「別段、大した事は求めていないがな」

淡々とした口調で、王は言う。

「わたしはただ、万人が平和であれと。幸福であれと願っただけだ」

平板な口調。

けれど、その瞳はどこかはかるようにこちらを見ている。

「ただ、そのためには。力がいるとは思ってたがな」

じつとこちらを見据える、青い瞳。
マリーによく似たその色。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1270w/>

忘らるる神の欠片～眠り男の英雄譚～

2011年12月5日21時50分発行